21
269.

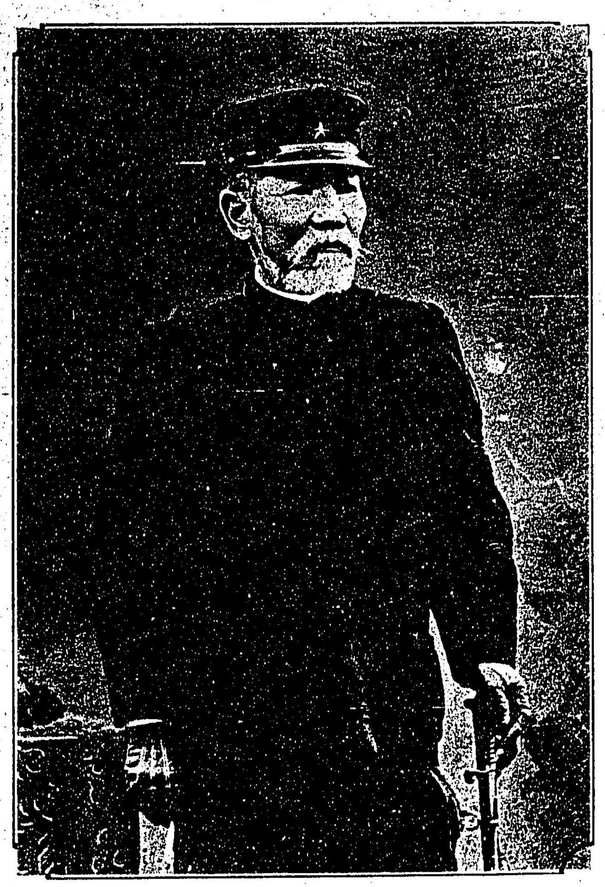
第七師團

日露戰役紀念史

滿州軍總司令官陸軍大將元帥侯爵大山巖

第三軍司令官
陸軍大將男爵乃木希典

聯合艦隊司令長官
海軍大將東鄉平八郎



第七師團長陸軍大將男爵大迫尙敏

第十三旅團長陸軍少將吉田清一

第十四旅團長陸軍少將齋藤太郎

第七師團參謀長騎兵大佐吉田平太郎

第七師團參謀步兵少佐鰐川五郎作

第七師團參謀步兵少佐竹上常三郎

歩兵第廿六聯隊長
歩兵大佐黒澤源三郎

歩兵第廿五聯隊長
歩兵大佐(少將)渡邊水哉

歩兵第廿八聯隊長
歩兵大佐奥田正忠

歩兵第廿七聯隊長
歩兵中佐竹迫彌彦

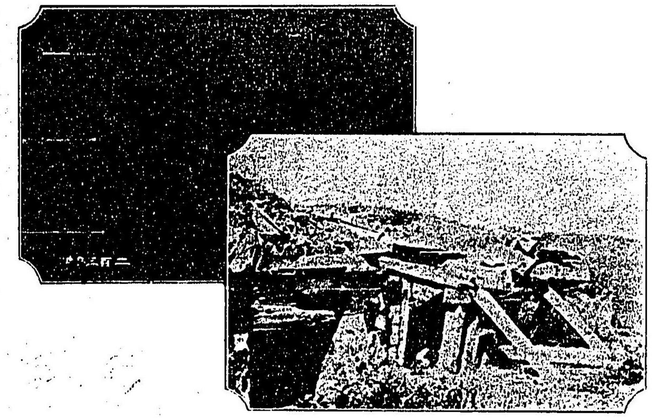
騎兵第七聯隊長
騎兵大佐白石千代太郎

砲兵第七聯隊長
砲兵大佐鶴見數馬

輜重兵第七大隊長
勳隅大佐中兵重輜

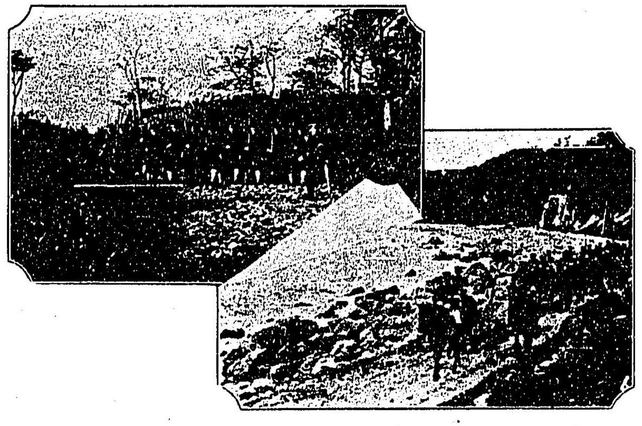
工兵第七大隊長
工兵中佐佐藤正武

旅順二〇三高地と戰死者の墓標

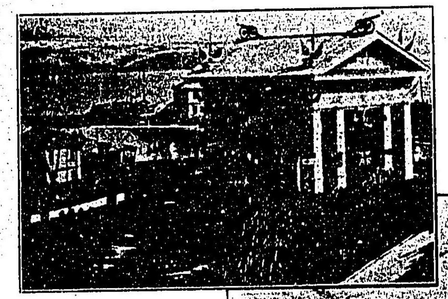


松樹山の掩蓋

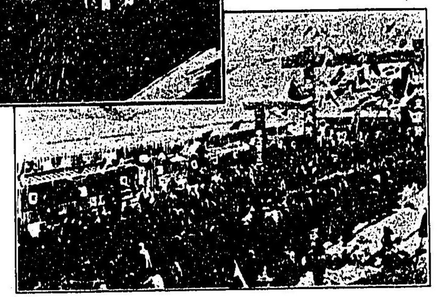
聯隊の前進



演習に於ける師團司令部の前進



過通門旋凱闕室



師團長以下旭川凱旋

陸軍大觀兵式

感謝表

日露兵ヲ交フルヤ皇師百戰百捷列國爲ニ震駭ス惟フニ明治三十七八年戰役ハ我邦空前ノ大戰ニシテ亦未曾有ノ大勝タリ此役ニ於ケル陸海兩軍ノ戰績世ニ傳フベキモノ一ニシテ足ラズト雖モ就中第七師團ノ勳功ノ如キ偉大壯絶千秋遺ルベカラズ第七師團ハ凜烈肌ヲ徹スル寒氣ヲ以テ練ラレタル北海ノ健兒ヨリ成リ夙ニ强勇ノ名アリ其一タビ征途ニ就クヤ彼ノ難攻不落ト稱セシ旅順ニ向ヒ特ニ二〇三高地占領ノ大命ヲ拜スルヤ士卒勇躍其死地ヲ得タルヲ喜ビ士氣爲ニ揚ル是ヨリ先友軍第一師團之ニ當リ死力ヲ出シテ尙且ツ刀折レ矢盡キ悲慘ニモ遂ニ全滅ニ歸シタリ

明治39 9 7
外交

夫レ二〇三高地ハ敵ノ據テ以テ生命ト爲シタル堅塞其攻略ノ容易ナラザル素ヨリ言フヲ俟タズ既ニシテ命令一下之ヲ斷行スルヤ各隊邁往突進砲聲轟キ彈丸飛ビ人斃レ壘崩ル死傷續出屍山血河ヲナスも敢テ意トセズ奮然敵壘ニ肉薄シ惡戰苦鬪連日ニ亘リ腥風山川ヲ捲キ鬼哭天地ニ充チ悲壯慘烈ヲ極メ辛ウジテ占領スルニ至ル旅順之ガ爲ニ陷リ敵艦之ガ爲ニ滅ビ全軍之ガ爲ニ振ヒ國威赫々北海師團ノ武名中外ニ轟ケリ然レドモ時局ハ之カ休養ヲ許サス直ニ長驅奉天ニ敵ト雌雄ヲ爭フヤ好謀善戰進退鬼神ノ如ク遂ニ大包圍ヲ完成シ古今未曾有ノ奇捷ヲ得タルヲ始メ爾後幾多ノ戰場ニ戰ウテ勝タザルナク攻メテ取ラザルナク我軍ヲシテ常勝軍ノ名ヲ博シ世界ノ歷史ニ一大光輝ヲ放タシメタルモノ實ニ師團與テ力アリ

抑本師團ガ今日ノ榮譽ヲ擔ヒタル所以ノモノハ閣下多年訓育養成ノ功ニ外ナラズ顧フニ閣下師團創設以來久シク之ヲ率ヰ苟モ一將一卒ト雖ドモ皆將軍ノ陶冶ニ依ラザルハナク將軍ノ爲ニ死ヲ誓ハザルナシ頃日閣下大將ニ進ミ今又任ヲ去ラントス道民タル者誰カ之ヲ惜マザラン

此時ニ當リテ本會ハ本戰役ニ於テ陣歿サレタル猛將勇卒ニ向ヒテハ謹ンデ哀悼ノ意ヲ表シ閣下以下名譽ノ凱旋將士ニ對シテハ滿腔ノ熱誠ヲ以テ其軍勞ヲ慰シ恭シク感謝ノ意ヲ表シ併セテ此光榮ヲ千古ニ傳ヘシメンガ爲メ茲ニ陸海實戰ノ梗概凱旋當時ノ狀況等ヲ蒐錄シ一小冊子ト爲シ以テ永ク本戰役ノ紀念ニ資セン

トス庶幾クハ本會旨趣ノアルトコロヲ了シ閣下ト生死ヲ共ニセシ將卒一般ニ本會員ノ微志ヲ傳示セラレンコトヲ

明治三十九年八月一日

北海道感謝表捧呈會

第七師團長

陸軍大將　男爵　大迫尚敏閣下

會員

北海道上川郡旭川町上川支廳官舍　安食高保
同五條通五丁目左九號　島村茂市
同近文二線一號　淺川浩
同　高田捨吉
同近文一線一號　佐々木彦吉
同　井口忠誠
同　近藤伊作
同　佐藤源吉
同　原田友三郎
同　溝淵龜次
同　風卷香清
同　工藤潤太
同　藤原光一
同　豐岡重右衛門
同　大石源治
同　永井彌市
同　小野寺吉四郎
同　前川成忠
同　三浦源次郎
同　丸箸繁次郎
同　佐々木喜三郎
同　米田直次郎
同　吉田民治
同　松山菊次郎
同　大島榮太郎
同　上田久三
同　藤田源藏
同　小林唯松
同　柳澤伊之助
同　恩田留吉
同　久米貞次
同　村木音次郎
同　八文字福太郎
同近文二線一號　後藤英三郎
同　白崎嘉太郎
同　齋藤玉三郎
同　勝見清松
同　小柳留吉

同　澁谷イト
同　志村熊太郎
同　阿藤元次郎　時計商
同　黑岩升太郎
同　吉田德松
同　河野政吉
同　長門松太郎
同　坂上文作
同　西村和三郎
同　織田知右衛門　時計商
同旭農場支場
同近文二線六號
同　伊藤豐太郎
同　得能繁次郎
同二線六號　川田石郎
同　菊地喜惣治
同　末武治郎吉
同　渡邊定次
同　川崎文吉
同　西村吉之助
同　中川なか
同　水野克已
同　入谷嘉吉
同　請川久吉
同　尾方八郎
同　青井源平
同　海野作藏
同近文二線十三號　鐵工場　吉永要太郎
同近文三線一號　菓子商　前田德藏
同　洋服商　阿部慈雄
同　菓子商　加藤智
同　郵便局內　住谷勝賢
同　洋服商　山下淺次郎
同　片山清左工門
同　長峰喜三太
同　小山內重吉
同　最上美三
同近文四線一號　濱田商會主
同　菓子製造業　山本元次郎
同　星野松次郎

同　加藤巳代吉
同近文五線十九號　城小三郎
旭川字中島　米穀荒物商　柴田磯五郎
同　竹細工業　齋藤新吾
同曙通右三十六號　翠香園主　池田菊次
同一丁目　牛日圖主　佐見鐵太郎
同一條通一丁目　笠原貞藏
同二丁目　後藤慶治
同四丁目　荒物卸商　海藤商店
同　菓子商　瀧野常吉
同　花輪富太郎
同　繪畫軒　德淵儀三郎
同六丁目　金物商　澤登菊十郎
同　第一總主　辻廣吶吉
同八丁目　今井合名會社
同　小間物商　平松良吉
同　疊業　高木兵太郎
同　印刻同醉巧堂　松山春次郎
同　稻月猪之松
同　旅館　宮越乙吉
同　藥舖　齋藤支店
同　旅館　富士野松藏
同九丁目　朝明支店主任　野島民助
同　吉川留吉
同　立野庄吉
同十丁目　時計商　佐々木源助
同　藤森音四郎
同　丸田發
同　齋藤宇太雄
同　小松源吾
同　馬場友分店主任　高橋幾三郎
同　筒井松次郎
同十一丁目　西谷重松
同　山田榮吉
同　石炭商　奧田文吉
同十二丁目　日比野松重
同　三田地安吉
同十三丁目　井內歡二
同十四丁目　岸田國太郎
同十五丁目　柴田鑄鐵機械場

同十六丁目　荒物商　澁谷與平
同十七丁目　福居清兵衛
同十八丁目　藥舖　市瀨又太郎
同宮下通八丁目　前田勝之助
同　丹野龜太郎
同二條通五丁目　忘歸樓主　三久保政吉
同十四丁目　米倉金五郎
同十五丁目　白崎與作
同　北見廣吉
同三條通六丁目　湊爲吉
同七丁目右十號　阿部惠三郎
同八丁目右一號　村上時計店
同十丁目　三國屋支店
同六條通七丁目左一號　大正堂　小川筆次
上川郡應栖村近文六線廿三號　野田繁太郎
同　相澤政治
同二十一號　高橋利三次郎
久保彌惣兵衛
堀井松右衛門
同五線二十號　大島仙松
同　長谷川熊太郎
同　長谷川銀三郎
松平農場　內田蹄
應栖村近文　寺尾森登
同字比布　吉田嘉市
同　矢田昇觀
同七線二十號　波多野磯八
同十線十七號　梶田鶴行
同　長山貞造
同十八號　木俣銀松
上川郡神樂村字神樂町北二番通六丁目　平手牧場主　一柳榮治郎
同本通五丁目　藤森音若
同二十三番地　米穀荒物商　原山幸吉
同十九番地　醬油釀造業　細野龜多六
同一番地　若林仁三郎
同御料地　海野友吉
同東旭川村　三橋長十郎
同永山村　和久時三郎
同　永峰利三郎

同　目良謙吉
同　高見清太郎
同　齋藤廣四
同　加藤元助
同　佐竹勝藏
同　山川榮太郎
同　水野重義
同　佐藤惣三郎
同　大崎大吉
同　森谷嘉七
同　永澤雄松
同　石田德二郎
同　小泉定之助
同　宍戸儀藏
同　植松長吉
同　森谷廣吉
同　齋藤爲吉
同　新居直藏
同　大泉ヨシ
同　三宮虎太郎
同　今井三十郎
同　神尾貞治
同　平川七次
同　平間新八
同　河野儀之平
同　半澤悅三郎
同　宮田爲太郎
同　小川茂吉
同　本田多一郎
同　柴田又藏
同　後藤吉藏
同　古田已代吉
同　角張誠
同　野波馬太郎
同　奧山豐太郎
同　佐藤鐵太郎
同　樋口龜三郎
同　宮崎作左衛門
同　岩橋安雄
同　柏倉又次郎

同　鹽野與惣次
同　稻葉鶴吉
同　澁谷美津
同　大崎卯太郎
同　福永國政
同　堀北永吉
同字牛別　橋本富士太郎
同近文二線一號寄留　福永八五郎
同郡當麻村　山畑役藏
樺太西海岸タラントマリ　柳田作次郎
宗谷郡宗谷村　宗谷外二ケ村戸長役場
同　宗谷西尋常高等小學校
同　宗谷東尋常高等小學校
同　宗谷南尋常小學校
同　知來別特別教育所
常呂郡常呂村　柴田喜久哉
同　佐藤豐朝
同　大島仁吉
同　大越善三郎
同　寺澤岩吉
同　柴田直次郎
同　上杉眞治
同　山田甚助
同　小林國藏
同　稻田勘二
同　寺元大道
同　新谷德治
同　小笠原三平
同　莊子豐治
同　森本丑太郎
同　梅津運量
同　阿部治太郎
同　泰周
同　西村研三
同　中山民藏
同　門脇善吉
喜都郡政泊村字水無　遠藤常八
同　石原淵源
同　高橋甚吾
同字ソイ泊　今井一二

同字石政泊　大崎熊吉
同字海產干場　金子政藏
同　近田金太郎
同　近田金助
同　近田留四郎
茨城縣那珂郡湊町字十三奉行（爲我流柔術師範）　藤井春吉
雨龍郡一巳村字字廢團體　加藤喜市
同　越知伊勢吉
同　矢野德次
同　吉井仁太郎
同　荒井清次郎
同　野村太市
同　山內鶴吉
同　曾我部槌藏
同字幌內　池田市松
同　藤原禮助
同　上田米吉
同　川副勇三郎
同　小谷野敬次郎
同　平川彌市
同　沼口新造
同　沼口久藏
同　高橋德松
同　野村國助
同　潮見仙五郎
同　高石繁太郎
同　山口丈太郎
同　松永又吉
同　高橋喜代次
同　津野銘之助
同　鈴木辨次
同　鈴木長則
同　有働宗次
同　有働芳一
同　岳衛吉
同　緒方秋來
同　前田清一
同　岳徹藏
同タトシ市街地　岡田大吉

同鷹治　上主倉吉
雨龍郡北龍村ウツカ　藤村鶴吉
同　大久保竹五郎
同　古川嘉藏
同ウツカオヤママナイ　松永順市
落部郡落部村　平川政市
同　宮川清次郎
同　野澤潤彌
同　奥田兵三郎
上磯郡上磯村字上町　中島有郷
浦河郡浦河町大字浦河村　宮崎喜一郎
岩内郡岩内町　三上常和
同　横山長藏
同　石澤太郎
同　菅野清三郎
同　佐藤浩氣
同　宇野末雄
同　飯田喜多治
同　平田鐘太郎
同　安藤昌勝
同　小川哲次郎
同　合田作太郎
同　長谷川清五郎
同　中里秀彦
同　道澤敬藏
同　野口恒次郎
同　宮川武彦
同　八木鶏一
同　村山永藏
同　小野寺兵次
同　三松安久
同　守屋則清
同　三橋常太郎
同　松井誠一
同　阿部太郎
同　加藤春吉
同　山添鶴藏
同　福田貞藏
同　三井藤太郎
同　進藤兼太郎
同　江縫多平
同　長谷部茂兵衛
同　和田德藏
同　箱守晋一郎
同　田中東策
同　粕谷福太郎
同　結城源七郎
同　菅野文哉
同　三宮郁治
厚田郡望來村大字聚富村　阿部岩吉
同　原田孫吉
同　近藤忠三郎
同　江本源太郎
同　川下傳吉
同　島田春藏
同　土上庄吉
同　伊豆原梅太郎
同大字望來村　野呂猛一
同大字望來村　内山良時
厚田郡厚田村大字古潭村　橋本德厚
同　佐藤恒隆

同　林田則友
同　室井左近
同　小笠原勝英
同　長尾貞市
同　中西藤市
同　江藤ウメ
札幌郡篠路村　篠原龍勝
同　青山諦念
同　篠原龍音
同　三上登太郎
同　篠附喜三太郎
同　太田半次郎
同　池内岩太郎
札幌郡手稻村大字山口村　庄司榮七
札幌郡琴似村　鈴木寅吉
同　石山源之助
同　佐々木叙二郎
同大字新琴似　進藤松藏
余市郡大江村長澤　下川基一
白糠郡白糠村　佐藤恒隆

同　廣瀨義覺　網走郡一美幌村　松田富太郎
同　大字厚田村　齋藤亮　同　山內廉
同　中居富吉　同　武藤初造
紋別郡雄武村　櫻井豐吉　同　長嶺勇
同　平川健之介　厚岸郡濱中村大字霧多布　五味兼吉
同　佐藤惣三郎　濱中村尙武會々頭　五味兼吉
同　高瀨鈑太郎　同村大字霧多布　松村留治郎
同　加藤歡作　同　吉田每太郎
同　河崎桃作　同　竹居吾朗
同　高木榮　松前郡福島村　坂口光重
同　鶴見雄　同　笹芳宇三郎
同　清島純之進　同郡太田村　阿部林太郎
同　橋詰光次　龜田郡假法華村　高木咿十
同　阿部八十次　同　宇野親和
同　高久忠次　同郡七飯村大字大中山　假法華尋常小學校
同　宮下謙松　石狩郡新篠津村四十七線北二號　十倉綱紀
同　福山善一郎　茅部郡鹿部村二十四番地　眞崎季正
同村基線二十七番地　松見久太郎　磯谷郡南尻別村字目名　河野孝忠
勇拂郡苫小牧村　湊定吉　松前郡福島村役場內　渡邊嘉代記
同　川村銀太郎　高橋重郎

同　檜山季理　佐藤末吉　同大字禮受村
同　森鶴松　平田大造　同三泊村
同　中山治三郎　小山內小一郎　久遠郡久遠村
同　坂本富五郎　村賀多良明　同
同　良本直藏　俵藤貞太郎　同
同　福井安松　小川弘霈　同
同　伊藤惣四郎　中村隆氏　目梨郡植別村
同　南彌八郎　佐久間進　同
利尻郡沓形村　玉置榮次郎　同
同　佐藤正吉　三國平六　同
同　越野信直　堀江嘉平　同
同　淺川輝太郎　細川逸清　同
留萌郡留萌村　伊藤孫右衛門　吉川正多朗　同
同　鳥海直隆　枝幸郡枝幸村　同
同　豐卷定安　釧路郡昆布森村　富田迪
同　星野安太郎　同　前田虎市郎
同　仲谷榮　黑木達也
同　藤森章文　同　小野須賀
同　高橋文平　同　佐藤兵一郎
同　佐藤卯助　釧路郡釧路町役場內　秋元幸太郎
同　有松準太郎　同　井元傳十郎

同　白川丈吉
同　大澤正佑
同　乙崎
苫前郡初山別村戸長　加倉井勇四郎
同村字セタクコナイ　興津寅亮
同初山別番外地　前田安次郎
同　新井田德太郎
同　須藤金五郎
同　藤田兼次郎
同　西取彌三郎
同　竹島萬吉
同　中濱行平
同　鈴木三郎
同字風連別番外地　小川豐吉
同　富田楳三郎
同　渡邊庄右衛門
同村番外地　田畑金之助
同　林長吉
同　西村佐七
同　三上孫九郎
同　日野宗太郎
同　青木丑
同　小林岩吉
同村番外地　鳴海重右衛門
同　稻垣實珊
同　尾崎俊亮
同　岡光用
同　陰山直吉
同　白川清一
同　香島重次郎
同　種田吉三郎
同宇モチクベツ番外地　佐藤岩吉
同村番外地　上田勇左衛門
同村字ウタコシベツ　上村常藏
同村番外地　桑原禮三郎
同　梶谷五平
同　永井常次郎
同　桃井宇之吉
同　三田抽待
同　松橋密藏

同　三角熊雄
苫前郡羽幌村　盛生常次郎
同　大井戸秀藏
同　菅野辰吉
同　本間藤右衛門
同　藏野六兵衛
同　渡邊茂治
同　神谷孝三郎
同　安藤幡江
同　古田鐵藏
同　愛國婦人會
千歲郡惠庭村　中村章
中川郡本別村　今村政吉
同　井上平吉
色丹郡斜古丹村　佐藤高次
同　荒井茂平治
室蘭郡輪西村　赤松圓太
同　添田欽允
同　松田禎作
同　灰原半十郎
同　瀧田卯吉
同　梅野榮
同　高橋篤太郎
同　岩崎正保
同　堀井宗太郎
同　椎名石松
同　筑山武夫
同　對馬榮藏
同　黑田林藏
同　椿虎平
同　竹江重誠
同　加藤貞諒
同　岩城廣司
同　津留嘉久藏
同　三上源次郎
同　松田定市
古平郡古平町　山口金治

謹告

一、本書は明治卅七八年戰役に於いて、功績多大なる第七師團に對して感謝表を捧呈し、其忠勇を不朽に傳へんが爲めに、特に本會の編纂せるものなり。

二、題して第七師團日露戰役紀念史と言ふも載するものは日露の國交より戰鬪凱旋等に至る迄の大要を掲ぐ要するに本戰役を遠く子孫永久に傳へんが爲なり。

三、本書は師團長以下各部隊長に獻し併せて會員に配布せり、

四、卷首の寫眞及官職等は凱旋當時のものに係る。

五、本書發行延引せしは論功行賞の發表を俟ちしが爲なり

六、本會は會員募集方宜しきを得ざるが爲め全道に行き届かざるかの感あり更に方法を更め會員を募り第七師團論功行賞の

時を以て再版發行勇士の氏名追加會員を附錄として追送すべし。

七、本會の旨趣を賛し熱心に誘導せられたる町村長戸長諸君に深き謝意を呈す。

八、各地とも師團戰史の出でざるはなし而して其内容を閲るに多くは針小棒大の筆にあらざれば單に其師團のみを賞揚するに似たり日露の役は日本陸海軍の大行動たり大勝利たり本書は務めて眞相を失はざらんことに着目し併せて第七師團を事實的に記せるのみ編者の特に意を用ゐたるところ茲にあり敢て大方の教を乞ふ

明治三十九年七月下旬

於伊豆修善寺温泉客舍

編纂主任識

第七師團 日露戰役紀念史目次

日露戰爭の起因　一
日露交渉の顚末　三
宣戰の詔勅　九
海軍の出師　一三
仁川港外の海戰　一五
旅順の初海戰　一六
第一回旅順の閉塞　一七
旅順口外の激戰　一九
第二回旅順の閉塞（廣瀨中佐の戰死）　二一
第三回旅順の閉塞　二四
旅順の大攻擊（マカロフ提督戰死）　三一
黑木第一軍の行動　三四
鴨綠江畔の戰　三五
寬甸城占領　三八
九連城占領　三八

鳳凰城占領　四〇
奥第二軍の行動　四一
遼東半島敵前上陸戰　四二
敵艦隊と我運送船　四六
我艦艇の沈沒　五二
金州南山の占領　五七
大連灣占領　六一
賽馬集占領　六二
川村獨立師團大孤山上陸　六二
得利寺の激戰　六三
熊岳城占領　六六
滿洲軍總司令部の出征　六六
旅順艦隊の突出　六七
分水嶺占領　六八
水雷艦隊の奇効　七一
摩天領の逆襲　七二
浦潮艦隊太平洋に來る　七二

營口占領　七三
大石橋の激戰　七四
野津第四軍の行動　七八
析木城占領　七九
海城牛莊の占領　八一
我五艦の喪失　八二
遼陽の大決戰　八四
浦潮露艦擊沈　八九
沙河の大會戰　九〇
乃木第三軍の活動　九五
旅順攻圍戰　九七
二〇三高地と兩師團の大惡戰　一〇〇
敵艦十六隻の最後（第七師團と海軍重砲隊の功績）　一〇一
旅順方面各砲臺占領　一〇二
旅順陷落　一〇五
彼我の軍使　一〇六
敵將の降伏狀　一〇六

乃木將軍の回答
臺，旨
攻撃中止
旅順開城規約
砲臺及軍器受渡
攻守兩將軍の會見
敵將の電奏及電勅
露國皇帝の勅答
旅順の捕虜數
旅順の鹵獲品
沙河敵軍大襲來
黑溝臺と第八師團の苦戰
川村鴨綠江軍の行動
清河城占領
奉天の大決戰
鐵嶺占領
奉天占領

一〇七
一〇八
一〇八
一〇九
一一二
一一三
一一四
一一五
一一六
一一八
一一九
一二四
一二七
一二九
一三五
一三五

昌圖及開原占領
英額城占領
波羅的艦隊の東航
日本海の大海戰(敵艦隊の全滅)
日露兩海軍損害比較表
樺太占領
北韓軍の行動
平和と米國の斡旋
媾和全權委員
媾和兩全權の會見
媾和成立
媾和反對論と帝都の戒嚴令
媾和に關する詔勅
日露媾和條約
平和克復陸海軍へ勅語
日露兩軍の撤兵
滿洲軍總司令部凱旋

一三五
一三六
一三六
一三八
一四六
一四七
一四八
一五〇
一五三
一五三
一五五
一五五
一五六
一六〇
一七一
一七二
一七五

凱旋奉告式　一七七
黒木第一軍凱旋　一八〇
奥第二軍凱旋　一八一
乃木第三軍凱旋　一八二
野津第四軍凱旋　一八五
川村鴨綠江軍の凱旋　一八七
東京市陸軍大歡迎會　一八九
陸軍凱旋大觀兵式　一九二
軍旗略歷　一九五
全世界陸軍比較表　一九八
靖國神社臨時大勅祭　二〇〇
第七師團戰歷　二〇二
露國に於ける日本捕虜の狀況　二一二
日本に於ける露國捕虜の狀況　二一三
媾和反對と國民大會　二一四
奉天に於ける凱旋式　二一五
遼陽の歡迎委員　二一八

岩見澤の歡迎會　二二〇
炭礦鐵道歡迎列車　二二〇
師團旭川凱旋　二二〇
凱旋軍北海道歡迎會　二二二
室蘭町歡迎會　二二四
第七師團臨時招魂祭　二二六
北海タイムスの歡迎文　二二八
師範學校の凱旋唱歌　二三〇
附錄
凱旋觀艦式　二三〇
陸軍武鑑

第七師團日露戰役紀念史目次終

第七師團

日露戰役紀念史

日露戰爭の起原

熟ら〳〵日露の遠因を尋ぬるに、我と彼とは、その國是に於いて、其の經庭雲壤も唯ならざるものあり。曰はく、我れは開國四十年列國との交誼を重んじ、世界文明の爲めに、東洋の平和を擁護せんことを希ひ、彼れは、彼得帝以來二百三十年、領土の呑噬蠶食を是れ事とす。我れは平和に孜々たるも、彼は侵略に汲々たり。其の間衝突なからんとするも豈に得べけんや。遠き原因は暫く措く、近くは、我が幕末、內事多端なるに乘じ、老獪なる手段を以て、千島樺太の交換を敢てし、我れより樺太全島を奪へり、これ豈に、千歲忘るべからざる恨ならずや。其の後と雖も彼れは巧に清國を籠絡し、韓國を威嚇し、唇を亡ぼして我が齒を寒からしめんとして止まず、明治二十七八年、日清兩國開戰清國連戰連敗の結果、馬關條約に依り、遼東半島及

(二)

臺灣を割き、償金二億兩を出して局を終らんとするに當り、俄然露獨佛三國の干渉來る。曰く遼東にして日本の領土たらしめんか、東洋の平和に害ありと、我は憤慨に堪へずと雖ども、新に三國と戰ふの不利なるを察し、隱忍涙を呑むで其忠告を容れ、遂に該半島を還附するの止むなきに至れり

爾來露國は邦土の廣大と兵員の多數を頼み、屢韓國に容喙して其獨立を妨げ、又清國の脆弱を機とし、私に李鴻章等と結び、遼東還附の恩に依て、時に清廷を威嚇し、遂に旅順大連を租借し、之に永久的防禦を施し、恰も隣邦我なきが如く、當年の忠言を忘れたるが如く其暴慢不禮言語に絶せり。茲に於てか我は暴國忿懲に堪へず、臥薪嘗膽、櫛風沐雨、何れの日か之に報いんと日夕汲々として武備を張り、國本を培養するもの茲に十年に及べり

是より先明治三十三年、北清に義和團てふ暴徒起り、猥りに外人を殺傷し、北京各國公使も亦此災厄に罹る。乃ち救援として列國兵を出して北京を攻め、遂に事止む而して列國會議の結果、諸强兵を撤せしも、露獨り大兵を滿洲に止むるのみならず、却て益々侵略的行動を敢てし、正に滿韓を併呑せんとす。然れども我は專ら圓滿を旨とし、忍耐且つ愼重の態度に依り、交渉を重ぬること半歲の久しきに及ぶも、彼れ露國は曠日彌久事を左右に托して敢て應せず、尙愈水陸の軍備を收め、益々挑戰的舉動に出でしかば、我が政府茲に決する處あり。外交斷絶して、遂に旗鼓の間に相見ゆるに至る。これを當時の桂內閣が發表せし交渉始末に見よ

日露交渉の顚末

（明治三十七年二月八日發表）

(三)

韓國の獨立及領土保全を維持し併せて該半島に於ける帝國の優越なる利益を擁護するは帝國の康寧と安全との爲め緊要缺くべからざるものなり故に如何なる行爲たるを問はず苟も韓國の地位を不安ならしむるものは帝國政府に於て之を看過することを能はず然るに露國は其清國との公約並に累次列國へ與へたる保障の存在するに拘はらず依然滿洲を占領し進んで韓國境域に於て侵略的行動を敢てするに至れり若し滿

洲にして露國の併呑に歸せんか韓國の獨立は素より支ふべからず故に帝國政府は速に露國と交渉を開き兩國利害の觸接點たる滿韓兩地に於て相互の利益を友誼的に調理し以て東亞の和局を恒久に維持せんことを期し昨年七月下旬露國政府に向つて右の希望を披瀝し其贊同を求めたるに露國政府も欣んで之に同意する旨を回答せり依て帝國政府に於ては八月十二日在露栗野公使をして協商の基礎として大要左の如き條件を露國政府へ提出せしめたり

一、清韓兩國の獨立及領土保全を尊重することを相互に約すること

二、清韓兩國に於ける各國商工業の爲めに機會均等の主義を維持することを相互に約すること

三、露國は韓國に於ける日本の優越なる利益を承認し日本は滿洲に於ける鐵道經營に付露國の特殊なる利益を承認し併せて第一項の主義に反せざる限り上記の利益を保護する爲めに必要の處置を執ることを相互に承認すること

四、韓國に於ける改革及善政の爲め助言及助力を與ふるは日本の專權に屬すること

とを露國に於て承認すること

五、今後韓國鐵道を滿洲南部に延長し以て東清鐵道及山海關、牛莊線に接續せしめんとすることあるも之を阻碍せざるべきことを露國に於て約すること

當時帝國政府に於ては交渉の進行に便にし以て一日も速に時局を解決せんことを期せるが故に露京に於て直接露國當局者と商議を爲さんことを希望したるも露國政府は同國皇帝陛下の外遊其他種々の理由の下に他迄も之を拒みたるが故に不得已東京に之を爲すことに決し而して露國政府よりは漸く十月三日を以て其對案を提出せり

該對案に於て露國は清國の主權及領土保全を尊重すること並に同國に於ける各國商工業上機會均等の主義を維持することを約するを拒み滿洲及其沿岸は全然日本の利益範圍外なることを日本に於て承認せんことを求め而て韓國に關しては日本の自由行動權に種々の制限を附し例せば韓國に於ける日本の利益保護上必要の場合には出兵の權あるを認じるも同時に韓國領土の一部たりとも之を軍略上の目的に使用する

ことを許さず甚しきに至りては北緯三十九度以北の韓國領域を以て中立地帶と爲さんことを提議せり

帝國政府は若し露國に於て滿洲併呑の意思なくんば何故に清國の主權及領土保全を尊重するが如き露國自ら累次聲明したる主義と全然其揆を一にする約款を協商中に挿入することを難んずるやの理由を解すること能はず故に露國政府が之を拒絶したることは帝國政府をして益々其挿入の必要を感せしめ且帝國は滿洲に於て現下既に商業上重大の利益を有するのみならず將來益々發達を爲すべきの望極めて尠なからず加ふるに政治上に於ては其韓國との關係よりして一層緊切なる利益を有するを以て全然之を我利益の範圍外と認むると能はざるは勿論なるが故に斷然之を拒絶するに決せり仍て帝國政府は右の意見を始めとし其他露國提案に對し一々必要の修正意見を提出し中立地帶に關しても若し之れを設くるに於ては滿韓境界の兩側に誇り一定の距離を劃するを至當なりとし各五十「ヰロメートル」に亘る地區を以て之に充つるの議を提出し東京に於て數次折衝の結果終に十月三十日を以て我確定修正案を露

國政府へ提出し爾後數回に亘り其回答を促したるに遂次も亦回答大に遷延し漸〳〵十二月十一日に至り之を接受せり然るに該回答に於て露國は滿洲に關する條項を削除し本協商を以て全然韓國に關するものとし而して韓國領土を軍略上の目的に使用せざること及中立地帶に付きては原主張を其儘維持せり然れども右の如く滿洲を本協商の範圍外に置くことは帝國政府が當初交渉を開きたるの主旨即ち滿韓兩地に於ける日露の利益を友誼的に調理し兩國衝突の原因を一掃せんとするの主旨に反するを以て帝國政府は十二月三十一日露國政府へ向つて其再考を求め又韓國に關しては前記の如く其領土使用上の制限を削除せんことを重ねて要求し中立地帶に付きては露國に於て之を滿洲に誇らしむることに不同意なる同上韓國にも亦之を設けざること素より當然なるが故に其全廢を提議せり

右に對し露國政府は一月六日を以て回答を與へたるが韓國に關しては依然上記二項を露國原提議の儘存置することを主張し之を條件として滿洲に關し日本又は他國が其清國との現行條約の下に獲得しなる權利及特權(但居留地設定を除く)の享有を阻

破せざるべきことを協約中に挿入することを承諾せり然れども右は滿洲の領土保全に關し毫も言及する處なく而して領土保全の確約に伴はざる前記の保證は實際に於て殆ど何等の價値なきものなり何となれば條約上の權利は主權と共に存亡するものにして若し露國に於て滿洲を併呑せば各國が清國との條約に因り享有する權利及特權も之と同時に消滅すべきものなればなり故に帝國政府に於ては飽迄露國をして滿洲の領土保全を尊重することを約諾せしむるの必要を認め居留地設定に關する制限は日清間に締結せられたる追加通商航海條約に抵觸するを以て之を削除し又韓國に關しては毫も讓歩の餘地なきを以て我修正を堅持するに決し一月十三日重ねて露國の再考を求め爾來數次其回答を促したるも露國政府は嘗に回答を與へざるのみならず之を與ふべきの時期すら指定せず

之を要するに帝國政府の始終穩和と公平とを以て政綱とし露國政府に向つても毫も難きを責むることなく唯同政府が累次且任意に聲明したる主義を承認せんことを求むるに過ぎざるも同政府は飽迄之を峻拒し加ふるに屢次不當に回答を遷延しつゝ一

方に於て水陸の軍備を充實し其大兵は既に韓國境上を壓せり帝國政府は實に衷心平和を念ふに切なるが故に隱忍以て今日に至りたるも露國の行動は帝國政府をして遂に妥協に望を絶ち談判を斷絶するの已むを得ざるに至らしめたり

一讀以て、帝國政府の如何ばかり平和の爲めに、隱忍抑制、彼れの反省を促したるか。更に宣戰の詔勅を捧讀するもの誰か我が叡聖文武なる　天皇陛下が、武道の思をなしたまへるの畏きことを體せざらん

宣戰の詔勅

詔勅

天祐ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜ク全力ヲ極メテ露國ト交戰ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜ク各〻其ノ職務ニ率ヒ其ノ權能ニ應シテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

惟フニ文明ヲ平和ニ求メ列國ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各國ノ權利利益ヲ損傷セスシテ永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スヘキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ國交ノ要義トヲ爲シ日暮敢テ違ハサラムコトヲ期ス朕カ有司モ亦能ク朕カ意ヲ體シテ事ニ從ヒ列國トノ關係年ヲ逐フテ益〻親厚ニ赴クヲ見ル

今不幸ニシテ露國ト釁端ヲ開クニ至ル豈朕カ志ナラムヤ帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ

因ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所タレハナリ然ルニ露國ハ其ノ清國トノ明約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ハラス依然滿洲ニ占據シ益〻其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併呑セムトス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸セン乎韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此ノ機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持センコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歳ノ久シキニ亘リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス凡ソ露國カ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ露國ハ

既ニ帝國ノ提義ヲ容レス韓國ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セラレントス事既ニ茲ニ至ル帝國カ平和ノ交渉ニ依リ求メムトシタル將來ノ保障ハ今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

明治三十七年二月十日

内閣總理大臣兼内務大臣	伯爵 桂太郎
海軍大臣	男爵 山本權兵衛
農商務大臣	男爵 清浦奎吾
大藏大臣	男爵 曾禰荒助
外務大臣	男爵 小村壽太郎
陸軍大臣	寺内正毅
司法大臣	波多野敬直
遞信大臣	大浦兼武
文部大臣	久保田讓

海軍の出師

半歳の交渉も其効なく、露國の遂に平和に意なきを見るや、帝國政府は、明治三十七年二月六日午後四時を以て栗野公使を通し、露國外相ラムスドルフ伯に交渉斷絶を通牒せしめ、一面直に艦隊をして戰鬪行動を取らしめたり

兵は神速を尊ぶ、機先を制するものは勝つ。日清戰爭に於て、浪速艦長として豐島沖に劈頭開戰を斷行したる東郷平八郎は、今や聯合艦隊司令長官として、二月六日

を以て威風堂々佐世保を發せり。翌七日朝鮮海面に集合するもの大小艦艇五十餘隻、則ち海軍少將瓜生外吉の率ゐる第四戰隊に臨時淺間艦をも加へて仁川に向はしめ、東郷中將自ら第一第二第三戰隊及驅逐艇隊を率ゐ、敵の根據地たる旅順口に向ふ。當日の編制左の如し(△は旗艦)

聯合艦隊司令長官 中將 東郷平八郎

第一艦隊司令長官 中將 東郷平八郎
- 第一戰隊司令官 少將 梨羽時起 △三笠 朝瀬 富士 八島 敷島 朝日
- 第三戰隊司令官 少將 出羽重遠 △千歳 笠置 高砂 吉野

第二艦隊司令長官 中將 上村彦之丞
- 第二戰隊司令官 少將 三須宗太郎 △磐手 浪間 出雲 八雲 常盤 晉妻
- 第四戰隊司令官 少將 瓜生外吉 △浪速 高千穗 須磨 明石 新高

○驅逐艇隊の夜襲　艦隊は旅順附近に至りて、驅逐艇隊第一第二第三を旅順に、第四第五を大連に向て夜襲を決行せしめらる即ち大連に進みたる艇隊は敵艦の空きか爲に歸還し旅順に向ひたるは戰闘艦ツエザレウヰチ。レトウヰザム。巡洋艦バルラダの三艦を擊破し九日午前二時を以て一の損傷なくして引揚げたり

○本艦隊の總攻擊　二月九日未明、主力艦隊は旅順を攻擊し、砲戰約四十分にして引揚げ、瓜生少將は二月七日聯合艦隊に分れて仁川に向ふ、此枝隊は浪速、高千穗等の第四戰隊にして、陸兵上陸援護の爲め、數多の輸送船をも率ゐぬ是より先き仁川には千代田艦が警備の任務を帶びて、敵艦二隻と共にあるあり。二月六日我艦隊が露西亞號を捕獲したるの報に接し、時局の破裂したるを察し、情報の露艦に達するを防ぎつゝ七日夜陰に乘じ、靜に拔錨して八日午前八時、朝鮮海に於て瓜生艦隊に合するを得たり

斯くて優勢なる瓜生艦隊は、九日午前七時仁川に達し、書を敵艦長に送り、告ぐるに開戰を以てし、午後一時敵の二艦一船を擊沈し陸兵を上陸せしめぬ。此役我艦隊一の死傷なく無事本艦隊に合せり、當時戰況電報左の如し

仁川港外の海戰

(三十七年二月十日午前零時十五分 瓜生司令官仁川發)

九日正午露國軍艦「ワリヤーグ」及び「コレーツ」仁川港より出で來る我が艦隊之れを八尾島以西に邀擊す砲戰三十五分の後ち彼は仁川港に退却せり午後四時卅分「コレ

ーフ」は爆發し其後「ワツヤーグ」及露國汽船「スンガリ」も破壞沈沒せり

（二月十一日午後二時東京著　東郷聯合艦隊司令長官發）

旅順の初海戰

聯合艦隊は去る六日佐世保を出發したる後總て豫定の如く行動し八日正午我が驅逐隊は旅順にある敵を攻擊せり當時敵艦隊の大部隊は旅順港外にありて我驅逐隊の水雷に掛りしもの少くとも「ポルターハ」形一隻巡洋艦「アスコリド」外二隻ありしものと認む我が艦隊は九日午前十時旅順口沖に達し正午より約四十分間港外に殘留せる敵艦を攻擊せり此攻擊の結果は未だ明瞭ならざるも敵に少からざる損害を與へ大に彼れが士氣を阻喪せしめたるものと信ず敵は漸次港内に逃走するものゝ如し午後一時戰鬪を止め引上げたり此攻擊に於ける我艦隊の損害は輕少にして寸毫も戰鬪力を減せず死傷は約五十八名にして内戰死四名負傷五十四名なり云々

第一回旅順の閉塞

○港口閉塞の必要　戰局の進行は陸兵を輸送し敵前上陸の必要あり。此時にして敵艦自由に行動せば、吾は容易にその目的を達すべからず、是を以て閉塞の壯擧は開戰以前に於て計畫せられ、今や東郷長官に依て決行せられたり

○壯烈なる出發　第一回の閉塞事業は二月二十三日を以て決行せられたり、即ち閉塞船として五隻の運送船を選び乘員七十七名は之を全艦隊に募る。應ずるもの頃刻にして二千餘名、或は願文を血書して參加を乞ふものあり、士氣頗る昂る、即ち定員を簡拔して之を諸船に分乘せしむ、其部署左の如し

船名	噸數	進水年	指揮官	機關士	其他
天津丸	二、九四二	二十年	中佐　有馬　良橘	大機關士　山賀　代三	一六名
報國丸	二、七六六	三年	少佐　廣瀨　武夫	同　栗田宮太郎	一四
仁川丸	二、三三一	十年	大尉　齋藤七五郎	同　南澤　安雄	一三
武陽丸	一、一六三	廿二年	同　正木　義太	中機關士　大石　親德	一〇

ーク」は爆發し其後「ワリヤーグ」及露國汽船「スンガリ」も破壞沈沒せり

旅順の初海戰

（二月十一日午後二時東京着 東郷聯合艦隊司令長官發）

聯合艦隊は去る六日佐世保を出發したる後總て豫定の如く行動し八日正午我が驅逐隊は旅順にある敵を攻擊せり當時敵艦隊の大部隊は旅順港外にありて我驅逐隊の水雷に掛りしもの少くとも「ポルタールハ」形一隻巡洋艦「アスコリド」外二隻ありしものと認む我が艦隊は九日午前十時旅順口沖に達し正午より約四十分間港外に殘留せる敵艦を攻擊せり此攻擊の結果は未だ明瞭ならざるも敵に少からざる損害を與へ大に彼れが士氣を阻喪せしめたるものと信ず敵は漸次港内に逃走するもの〻如し午後一時戰鬪を止め引上げたり此攻擊に於ける我艦隊の損害は輕少にして寸毫も戰鬪力を減せず死傷は約五十八名にして内戰死四名負傷五十四名なり云々

第一回旅順の閉塞

○港口閉塞の必要　戰局の進行は陸兵を輸送し敵前上陸の必要あり。此時にして敵艦自由に行動せば、吾は容易にその目的を達すべからず、是を以て閉塞の壯擧は開戰以前に於て計畫せられ、今や東郷長官に依て決行せられたり

○壯烈なる出發　第一回の閉塞事業は二月二十三日を以て決行せられたり、即ち閉塞船として五隻の運送船を選び乘員七十七名は之を全艦隊に募る。應ずるもの頃刻にして二千餘名、或は願文を血書して參加を乞ふものあり、士氣頗る昂る、即ち定員を簡拔して之を諸船に分乘せしむ、其部署左の如し

船名	噸數	進水年	指揮官	機關長	其他
天津丸	二、九四二	二十年	中佐 有馬 良橘	大機關士 山賀 代三	一六名
報國丸	二、七六六	三年	少佐 廣瀬 武夫	同 栗田宮太郎	一四
仁川丸	二、三三一	十年	大尉 齋藤七五郎	同 南澤 安雄	一三
武陽丸	一、一六三	廿二年	同 正木 義太	中機關士 大石 親德	一〇

武州丸　一、二四九　十六年　中尉　鳥崎保三　少機關士　杉　政人　一三

有馬中佐之が總指揮官たり、準備既に成り二月十八日午後六時東郷長官は上村長官と共に總指揮官以下に晩餐を供し東郷長官杯を擧げて壯擧を祝し有馬總指揮官起て長官の好意を謝し且つ曰く『成功は誓て疑はず、只再會は期し難し』と滿座壯烈の氣に打たる

翌十九日夜半七十七士は將に五船に分乘せんとす、所屬各艦皆送別の式を擧げ其行を壯にす、廿日閉塞船隊は出發す。眞野中佐四驅逐船を率ゐて敵の偵察と港外の哨艦を搜索破壞するの任に當り、櫻井少佐は五水雷艇を率ゐて閉塞隊員收容の任を帶び、閉塞船隊の先頭として順次敵港に向ひ、遂に之を決行したり。此役三隻の乘員は悉なく收容せしも、仁川、武州の乘員は砲火の爲に收容隊に會せず、海上を漂泊して二十七日に至り、齋藤大尉鳥崎中尉外二十九名支那船に救はれて根據地に歸れり。而して我は戰死一負傷三の外總て生還す。三月三日、東郷聯合艦隊司令長官の報告左の如し

（東郷聯合艦隊司令長官報告三月三日午後七時三十分東京着電）

旅順口閉塞隊指揮官有馬良橘よりの報告に依れば武州丸は敵彈の爲め舵機を破壞せられ饅頭山下に擱岸し廣瀨武夫の指揮せる報國丸は殆んど港口に達したるとき其側に座礁せる「レトウキザン」より猛烈なる射擊を蒙ふり同じく舵機を破壞せられ且つ船首に火災を起し遂に燈臺下に擱岸沈沒せり又齋藤七五郎の指揮せる仁川丸も港口に入らんとするとき燈臺より南東約二鏈半の位置にて沈船と思はるゝものに觸抵し進行する能はずして其位置に爆發沈沒したるものなり右報國丸、仁川丸の二隻は完全に港口を閉塞せるも目的の一部は達し得たるものなり仁川丸閉塞隊員中二等機關兵楳原健三は沈置後端艇を卸さんとする際敵彈の爲め戰死せり其他報國丸の下士卒三名輕傷したる外閉塞隊員は皆無事云々

旅順口外の激戰

（東郷聯合艦隊司令長官報告三月十二日午後八時十分東京着）

聯合艦隊は豫定の如く行動して更に昨十日旅順口の敵を攻擊せり

驅逐隊の二隊は同日午前零時旅順口港外に達し港外を搜索して敵なきを認め天明迄

港外に留まりて乙驅逐隊は各所に特種の機械水雷を沈置せしが敵の要塞は之に對し時々砲擊したるも我驅逐隊は無事其目的を達するを得たり然るに午前四時三十分頃甲驅逐隊は老鐵山の南方に於て約六隻より成る敵の驅逐隊に會し近距離に於て約二十分間激戰し朝潮霞曉の三艦は敵の諸艦と殆んど舷々相摩せんとするが如く接戰し敵の三四艦に猛烈なる砲火を加へたるを以て敵は或は汽罐を破損し或は火災を起し或は悲鳴を揚げ多大の損害を負ふて敗走せり我三艦も亦敵彈の爲め多少の損害を被り死傷十五名內戰死下士卒七名負傷霞の大機關士南澤安雄の外下士卒七名ありたり就中曉は汽罐の補助汽管を破壞せられ一時漏汽したるが故に機關兵四名熱傷に依り戰死せり但各艦共に戰鬪航海に支障あらず又乙驅逐隊は午前七時港外を去らんとする際偶々洋中より旅順口に入らんとする敵の驅逐艦二隻を發見し直ちに其前路を遮りて之を攻擊し戰鬪約一時間多大の損害を加へたる後其一隻を逸したるも他の一隻「ステレグーシチー」號を擊破し敵の要塞砲火の下に於て漂は之を捕獲し曳航しつゝありしも漏水甚しく且つ波浪高く曳綱切斷せしを以て捕虜兵四名を收容して捕獲敵

艦を放棄せり其後午前十時十五分に至り右「ステレグーシチー」號は全く沈沒せり此戰鬪に於て乙驅逐隊の諸艦にも損傷ありしも多大ならず漂、曙の二艦にも戰死卒二名負傷曙の少尉島祐吉外下士卒三名ありたり(以下略す)

第二回旅順の閉塞

○第二回の壯擧　第二回の閉塞は上記の如く壯烈を極めしと雖も敵の戰艦は其後も尙港外に出動し、閉塞の必要は愈々加はれり、第二回の港口閉塞は避くべからず。旅順口の入口は其幅僅に二町餘、且つ老虎山下は淺瀨にして大艦の通航し得べき所は僅に一町半に過ぎず、即ち第二回の事業として更に四隻の閉塞艦隊を編制せり、之に乘組むべき決死隊員は六十五名を選定したり、有馬中佐再び之が總指揮官たり。其部署左の如し

船名	噸數	進水年	指揮官	機關長	其他
千代丸	二、七〇七	十二年	中佐 有馬良橘	大機關士 山賀代三	一五人

福井丸　二、九四三　十五年　少佐　廣瀨武夫　同　栗田富太郎　一六
彌彦丸　二、六九二　十二年　大尉　森初次　同　小川英雄　一三
米山丸　二、六九三　十二年　大尉　正木義太　中尉　島田初藏　一三

而して之が掩護及收容の任を帶べる艦艇驅逐艦十一隻水雷艇五隻とす

（東鄕聯合艦隊司令長官職官）

聯合艦隊は去二十六日再び旅順口に向ひ同二十七日午前三十分敵港閉塞を決行せり四隻の閉塞隊は驅逐隊及水雷艇隊掩護の下に旅順口港外に達し敵の探海燈の照射を冒して港口に直進し約二海里に達する頃敵の發見するところとなり兩岸の要塞及哨艇より猛烈なる砲火を受けしも之に屈せず四隻相次で港口水道に闖入し第一の千代丸は黃金山の西側に於て海岸より約半鏈の處に投錨爆沈し第二の福井丸は千代丸の左側を過て少しく前方に進み投錨せんとするとき敵驅逐艦より魚形水雷一發命中し次で其の位地に爆發沈沒し第三の彌彦丸も福井丸の左側に出で投錨爆沈せり第四の米山丸稍〻後れて港口に達し敵の驅逐艦の艦尾を衝突しながら既に沈沒せる千代丸と福井丸との間を通過し水道の中央に投錨せし時敵の魚形水雷一發を受け爆裂し惰

力の爲め左岸に近く艦首を左にして横に沈沒せり敵の猛烈なる砲火の下に於て斯の如く閉塞船が勇敢沈着其任務を遂行したるは事業として間然する所なく誠に賞讃すべきに餘りあり唯遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に尙ほ空隙を存し完全に通路を閉塞するを得ざりし一事なりとす此壯烈なる閉塞の再擧は前回之に從事せし勇士の切願を容れ將校及機關士主として前回の者をして之に任せしめ下士以下のみは新志願者を以て交代せしめたり閉塞隊員中戰死中佐廣瀨武夫、兵曹長杉野孫七外下士卒二名、重傷中尉島田初藏、輕傷大尉正木義太、大機關士栗田富太郎外下士卒六名にして其他は悉く無事我が水雷艇驅逐艦隊に收容されたり戰死者中福井丸の廣瀨中佐及杉野兵曹長の最後は頗る壯烈にして同船の投錨せんとするや杉野兵曹長は爆發藥に點火する爲め船艙に下りし時敵の魚形水雷命中したるを以て遂に戰死せるものの如く廣瀨中佐は乘員を端舟に乘移らしめ杉野兵曹長の見當らざる爲め自ら三たび船內を搜索したるも船體漸次に沈沒海水上甲板に達せるを以て止むを得ず端舟に下り本船を離れ敵彈の下を退却せる際一巨彈中佐の頭部を撃ち中佐の體は一片の肉塊を艇

内に殘して海中に墜落したるものなり中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑たるのみならず其最後に於ても萬世不滅の好鑑を殘せる者と謂べし云々

第三回旅順の閉塞

○閉塞船隊の部署　前後二回の壯擧も未だ全功を奏する能はず、而も陸上の形勢は敵を港内に閉塞するの必要益々大なるものあり、是に於て我海軍は五月三日第三回の港口閉塞を決行し、三たび決死の將卒を募る、應ずるもの二萬以上、全軍殆ど決死隊なり、即ち之を選拔し部署を定めて十二隻の閉塞船に配置し海軍中佐林三子雄氏を以て之が總指揮官たらしむ、前二回の經驗は幾多の教訓を與へ大に船數を增加し探海燈を裝置する等規模大に整へり

一切の準備完結、各閉塞船及び掩護艦艇は五月一日午後五時根據地を發す其編制左の如し（總員百五十八名）

▲閉塞船隊

船名	噸數	指揮官	指揮官附	機關長	其他乘組
遠江丸	一、九五二	少佐　本田親民	中尉　森永尹	大機關士　竹内三千三	一五人
佐倉丸	二、九七八	同　白石俊江	大尉　高橋靜	機關少監　寺島清太郎	一七
愛國丸	一、七八一	大尉　大塚太郎	同　内田弘	大機關士　青木好次	二一
江戸丸	一、七二四	少佐　高野直夫	中尉　永田武次郎	中機關士　與倉守之助	一五
朝顏丸	二、四六四	同　向菊太郎	同　糸山貞次	機關少監　清水雄苑	一五
相模丸	一、九二六	同　湯淺竹次郎	大尉　山本親之	同　矢野研一	二一
三河丸	一、九六七	大尉　匝瑳胤次	中尉　大西良輔	中機關士　豐田稔	一五
小樽丸	二、五四七	少佐　野村勉	大尉　笠原三郎	機關少監　岩瀨正	一五

外に釜山丸、新發田丸、長門丸、小倉丸の四隻ありしも途中風浪に阻まれ引返せり

▲援護艦及驅逐隊

赤城　鳥海　第二驅逐隊　第三驅逐隊　第四驅逐隊　第五驅逐隊　第十艇隊　第十四艇隊

○猛然敵港を閉塞す　閉塞船隊は五月二日午後七時頃旅順の東方五十浬の圓島に至る、此時風强く波高く天候頗る險惡を極む。旅艦三笠より「天候不良なるが

如し、總指揮官の意見如何』との信號ありしに林中佐は之に答へて『此風は所謂地風なれば旅順口の波濤は靜穩なるべしと信ず、故に今夜閉塞を決行す』と、各艦皆萬歳を唱へ『成功を祝す』と信號して其行を壯にす

艦隊と別れたる閉塞隊は風浪を排して豫定航路を旅順口に向ひ前進せしが不幸にして二日午後十一時頃より南東の强風俄かに吹き起り、波濤洶湧して爲めに各船離散し相失ふに至れり

林中佐は船隊の集合到底見込なきを認め閉塞事業中止の命を下し赤城艦をして之を各船に傳へしむ。赤城即ち夜中の信號をなしたりしも怒號せる風浪に妨げられ信號周く通達せず、午前二時頃迄通信に盡力せる間に船隊は相前後して既に旅順口沖に達せり

先頭第一に進たる亟瑛大尉指揮の三河丸は港外を偵察せる第十四艇隊に對する敵の砲火を見て、前續船既に港口に突進せるものと思考し、直に港口に向つて邁進し、白石大尉の指揮せる佐倉丸之に續く、敵は港口附近に敷設せる視發水雷を發火し、

强力なる探照と猛烈なる砲火とを以て之を防禦せしも、三河丸は港口防材の一部を破りて奥深く水道に闖入し中央の好位置に投錨爆沈し、佐倉丸と思はしきもの港口尖岩の附近に投錨沈沒せしも、生存者皆無なるを以て其情況を知るに由なし、之に次で本田少佐の指揮せる遠江丸、高柳少佐の指揮せる江戸丸、野村少佐の指揮せる小樽丸、湯淺少佐の指揮せる相模丸、犬塚太尉の指揮せる愛國丸、向少佐の指揮せる朝顔丸も相次で港口に向ひ猛進す

此時敵の防禦砲火猛烈を極め、其敷設水雷は前後左右に爆發し、閉塞隊員の戰死負傷する者最も多かりしが、遠江丸は港口防材に衝突し船首を東にし殆んど港口の半部を閉塞して其位置に爆沈し、江戸丸は港口に達し將に投錨せんとする際高柳指揮官は腹部を射られて戰死し、指揮官附海軍中尉永田武次郎氏直に之に代はり投錨を命じ、次で爆沈せり

野村海軍少佐の指揮せし小樽丸も亦激烈なる敵の探照砲火を冒し黄金山の探海燈光を目標として港口に直進し、午前三時五分港口の防材を突破して水道に入るを得た

るも、水道内に哨戒せる敵の砲艦ギリヤークの如き及驅逐艦より近距離にて猛射を蒙り、忽ち舵機を破壞せられて操舵の自由を失ひ遂に水道の西岸に近く船首を約西北西に向け投錨爆沈せり。爆沈後指揮官野村少佐は徐に爆破の結果を檢し其充分水道の左半一部を閉塞したるを確め乘員を第一端舟の傍に集合して退去を命じしが、敵彈の爲め其端舟は破壞して水中に落ち野村少佐外下士卒二名も此に戰死し、指揮官附笠原太尉幾員を率ゐて第二端舟を下し之に乘艇せしが、其時本船は已に全く沈沒して纔に煙突及び檣のみを現はせる有樣にて端舟は覆沒を免れ辛うじて本船を離るゝことを得たり。然るに敵の砲火激甚なる爲め乘員續々敵彈に斃れ艇も亦遂に粉破せられ、乘員皆水中に入りしも疲勞の極多くは生氣を失ひて其儘溺死し、翌朝に至り岩瀬機關少監以下、下士卒七名のみ敵に救助されたり。(機關少監は其後壯烈なる病死を遂ゲ)

又湯淺少佐の指揮せし相模丸は當夜午前二時四十分頃小樽丸に次ぎて港外に達し徐航して港口附近に機械水雷を沈置しつゝ進入し、午前三時三十分頃港口防材の切目より東岸に沿うて水道に闖入し、小樽丸の爆沈位置と殆んど並頭に來りたる頃、船首を約北西に向け水道の右半一部を閉塞する如く完全に爆沈を遂げたり。茲に至るまで同船は素より敵の猛射を受けしも未だ乘員一人の戰死するものなかりしが、爆沈後本船を退去せんとするに當り更に四周より敵に亂射せられ、端舟は大抵破壞せられて用を爲さず。纔かに破損せる一艇を下して之に乘じたるも漏水甚しくして忽ち顚覆し、乘員は終に水中に四散して相失し、湯淺少佐以下多くは此間に戰死し、殘員九名翌朝に至り敵に救助せられたり

愛國丸は港口より約五鏈のところに於て敷設水雷に罹り瞬時に沈沒し、指揮官附内田弘氏同機關長青木好次以下八名行方不明となれり。朝顏丸と思はしきものは舵機を損じたる者の如く、港口に達せずして終に黃金山下に爆沈したりしが、是又生存者皆無なるを以て其情況を審にせず

以上八艘の閉塞船の内五艘は港口に入りて爆沈せしを以て、港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し充分閉塞せられたり。嗚呼勇士の骨は空しく埋られず、其血徒に

流されず、前古未曾有の大業は遂に成就したり

○未曾有の壯烈慘凄　然れども此戰は實に慘烈を極めたり。天候の異變と敵の防備增大したるとは相俟て非常の損害を我に被らしめたり、佐倉丸及び朝顏丸の乘組全部三十八名は總て戰死し、小樽、相模の兩船は前記十六名敵に收容せられたる外皆戰死し、遠江丸は十五人(內七名負傷)愛國丸は十六人(內四名負傷)江戶丸十六人(內三名負傷)三河丸十七人(內六名負傷)生還し、敵の收容者と合せて八十名は生還したるも他の七十八名は何れも壯烈なる最後を遂げたり。小樽丸相模丸生存者が露兵より聞知せる所に據れば頭部及び腹背部に數創を負ひたる勇敢なる一大尉幷に十數名の重傷せる下士卒を翌朝(三日)收容救助するを得たるも皆收容後死亡せりと。又翌日(三日)海岸に漂着し露軍にて埋葬したる將校下士卒の屍體約三十許なりしと云ふ。嗚呼我閉塞隊員は花よりも潔よき日本男兒の最後を遂げたるなり。東鄕長官は其公報に記して曰く『其忠烈の事蹟は永く帝國の史乘に特記すべきものなりと信ず』と

旅順の大攻擊

○マカロフ來任　露國大平洋艦隊司令長官中將スタルクは劈頭第一の海戰に機宜を失し、艦隊の大破損を招きたるを以て職を免せられ、露京に召還せられ、二月二十日マカロフ中將代て司令長官の大命を拜し三月六日旅順に入る彼は世界三大戰術家の一人と稱せられ識見卓拔、膽略氣魄亦群を拔く。彼の新任は露國陸海軍の大歡迎を受けその士氣を振起したること頗る大なり

○機械水雷を沈置す　聯合艦隊は四月十一日より豫定の如く行動し、更に旅順口の敵に對して第七八次の攻擊を爲せり、第四驅逐隊第五驅逐隊第十四水雷艇隊及び蛟龍丸は十二日夜半旅順港外に至り、敵の探照を冒して港口に近づき、計畫の通り港外の各所に機械水雷の迅速なる沈置を遂行し得たり、是ぞ翌十三日に敵の旗艦を爆沈し司令長官マカロフ中將を斃せし素因なりしなれ

○敵司令長官マカロフの戰死　第三戰隊は午前八時港外に達して第二驅逐隊を掩

護し、且つ敵情を偵察せり。午前九時頃敵艦バーヤンは驅逐艦ベストラシヌイが我第二驅逐隊の爲めに窘窮せらるゝや、之を掩助せん爲め我に向ひ突進し來り、遠距離より砲撃を開始したり。依て第三艦隊は徐々に應戰して之を撃退せり。幾もなく敵艦ノーウキック、アスコリド、デアナ、ペトロパウロスク、ポベーダ、ポルターワ等バーヤンと合し攻勢を取りて反撃し來り、第三戰隊は之に應戰しつゝ敵を東南方向約十五海里に誘致せり、此時沖合約三十海里に方りて濃氣の内に隱れたる第一戰隊は第三戰隊の無線電信に接し、直ちに急進して敵艦隊に逼りしが、敵は艦首を轉じて港口に向ひ背進せしを以て、尚益々追窮して之を港前に壓迫せり

港口に背進したる敵艦隊は旗艦ペトロパウロスクを先頭とし港内に逃入らんとせしに、ペトロパウロウスクは前夜沈置したる我機械水雷に罹り、前後四回の爆發を受け黑煙濛々艦體を包みしが僅に二分間にして轟沈したり。時に午前十時三十二分、敵の殘艦は此慘憺たる光景に驚きて大に混亂したり。尚敵報に依れば戰艦ポベーダも亦右舷中央に魚形水雷命中し大損害を受けしとあり。我公報に『尚外に一敵艦の

進退自由を失ひたるの疑ひありしも、敵艦隊混雜の爲め其艦型を識別する能はざりし』と云へるものは即ち此ポベータなりしなるべし。其後敵の殘艦は約一時間頻に艦側附近の水面を砲撃しつゝ漸次に港内に入り、正午過ぐる頃港外に敵影を見ざるに至れり

此戰鬪の初期砲戰に於て第三戰隊は一の損傷なく、敵の損害も亦少許なるべく、第一戰隊は遂に敵と砲戰距離に近づかざりし

此時ペトロパウロスクにはキツル大公、マカロフ司令長官等乘組居りしかば、爆發と共に二三の僚艦艇は直に之が救助に從ひしも、艦隊參謀部に於て艦隊司令長官マカロフ中將、參謀長モーラス少將以下上長官三、尉官六、同相當官四、陸軍參謀大佐一即死して軍艦乘組定員に於て副長一、尉官七、同相當官三、僧侶一、下士五百九十六即死し、大公爵キツル艦長ヤコーレフ大佐其他將校六、下士以下三十二負傷し下士卒四十一と共に救はれたり。此際露國の書伯ヴエンストチャギンも亦難に殉したり

黑木第一軍の行動

我海軍の一舉にして露國東洋艦隊を擊破し、尋で敵を旅順港に閉塞して士氣大に揚る。此時に當り近衛(東京)第二(仙臺)第十二(小倉)の三個師團を合して第一軍編成陸軍大將黑木爲楨軍司令官に任じ、極めて秘密に且敏活に韓國大同江に上陸し、之が先發隊は三月二十八日を以て定州を占領し、四月三十日一舉にして露軍を鴨綠江に擊破せり。之を日露戰役に於ける陸戰の序幕とす

爾後他の各軍の出征するに及び、軍は常に全軍の右翼となりて峻嶮なる遼東の脊嶺山脈を蹴破し、第二軍第三軍第四軍等の上陸に際し、大に牽制運動を試みて常に露軍を苦め、友軍の上陸を安固ならしめたる功績は世既に定論あり。而して大山滿洲軍の出征以來。遼陽の占領に沙河の會戰に、奉天の大捷に、一として參加せざるなく克く難戰苦鬪を忍び、每に黑鳩公をして震慴せしめたるは、實に黑木軍にして、其名全世界に赫々たるもの亦これが爲なり

因に記す參謀長は少將藤井茂太にして久邇宮少佐殿下も亦參謀として能く謀策せられたりと承はる

鴨綠江畔の戰

(四月三十日 黑木大將報告)

架橋準備を爲すの必要上軍は廿六日朝威力を以て即ち近衛師團の一部を以て九里島の敵を擊退して之を占領し第二師團の一部を以て黔定島を占領せり敵は悉く九連城方向に敗退せり此戰鬪により我死傷者近衛師團戰死(一字不明)重傷九、輕傷十六名、第二師團死傷なし又敵は少からざる死傷者を運搬し去るを見たり但し我衛生隊に收容したる敵の重傷者(乘馬斥候兵)一は東部西伯利狙擊步兵第二十二聯隊のものにして同人の言によれば同第廿二、狙擊第廿四聯隊も亦前面にあり其長官は少將ツルメフにして各聯隊は二大隊より成り乘馬斥候百四十二を有す敵は九連城後方高地にある砲八門(九サンチ半)を以て西湖洞附近を射擊せり又虎山の高地に「ポッチキス」機

砲二門を現せり元化洞高地にありし我砲兵一中隊は虎山の高地に現はれたる敵の高等司令部らしきものに對し三回の一齊射撃を行ひしのみ

廿六日正午頃より九連城の砲兵は義州附近を砲撃し近衛歩兵第一聯隊の兵卒二榴散彈の爲め負傷せり廿七日も亦時々砲撃す我兵は應射せず

九里島にありし第廿二聯隊乘馬斥候部隊長少尉セミョーノフの死體を九里島對岸にて發見し義州城内に埋葬せり

細谷艦隊より派遣したる宇治摩耶の砲艦二水雷艇二武裝蒸汽船は中川海軍中佐の指揮の下に廿五日夕龍巖浦に入港せり其際宇治は安子山より敵の砲撃を受けたり廿六日朝水雷艇一小蒸汽艇一は水深測量の爲娘娘城附近に進航せり艦隊は午後五時より同五十分迄安子山の敵と對戰し敵砲を沈默せしむ又其附近を通航する敵騎百を砲撃せり海軍は損傷なし(中略)

一、第十二師團は今朝午前三時水口鎭に於ける架橋完成續て渡河午後六時豫定の陣地に著く

二、野戰砲兵第一聯隊及重砲兵聯隊は未明迄に豫定の陣地に着く午前十時四十分點定島より中江臺に出したる我歩兵斥候に對し九連城北方及東方高地にある敵の砲兵之に向て射撃したるを端緒とし猛烈なる砲戰を開けり午前十一時十五分九連城の敵砲兵は沈默す馬溝東方の高地にある敵の砲約八門は九里島西方の架橋點に向ひ射撃を續行せり我が義州東方に布置せる近衛砲兵之に應ず約十分の後馬溝東方の敵砲兵亦沈默す午後零時半兩方面の敵砲兵再び射撃を開始せしも我射撃の爲一時二十分頃再び沈默せり

我砲撃の結果敵に充分なる損害を與へたるものと認む我軍の損害は輕傷將校五、下士以下即死二、負傷廿二なり

三、鴨綠江本流の架橋は午後八時完成し諸隊は續々虎山北方の高地に前進す

四、細谷艦隊の枝隊は安東縣に於て戰鬪に參與し就中裝砲汽艇は敵の砲兵及歩騎兵と最も激烈なる戰鬪をなし歩騎兵約四百を撃退せり

五、軍は豫定の如く明一日未明砲撃を實行せんとす

六、敵の砲兵は發射速度大にして其の洩火彈は確實に七千五百米突以上に達す

寛甸城占領

（黒木大將報告
大本營着電）

五月七日我支隊は已に寛甸城を占領せり

十一日午前六時我歩兵の一部隊雪裡站より退却する敵騎三百餘を攻撃し負傷せる中尉及卒二を虜にせり

此騎兵は後貝加爾哥薩克騎兵師團に屬しあるチチンスキー聯隊なり中尉はホンフリー大將の子にして近衛騎兵コンヌイ聯隊に在りしも希望によりて轉職したるものなり斯の如き士官は尚多數ある由

九連城占領

（十一月二日
黒木大將報告）

敵は九連城西北高地に於て再び抵抗を試みしも午後一時五十分より退却を始め軍の右翼隊（第十二師團）は大樓房中央隊（近衛師團）は蛤蟆塘左翼隊（第二師團）は安東縣に向ひ又軍の總豫備隊は遼陽街道に前進し午後六時軍は安東縣より老古溝を經て梨樹溝に亘る線を占領し特に蛤蟆塘附近にて三面より敵を包圍し激烈なる戰鬪の後砲廿門馬匹車輛共悉皆將校廿餘名下士卒多數を捕虜となせり

我に對せし敵は狙撃歩兵第三師團の全部及び同第六師團の第二十二第二十四聯隊とミシチエンコの騎兵旅團砲約四十門、機關砲八門にして鳳凰城方向に背走せり我軍の死傷は多くも將校以下七百ならん戰利品速射砲廿八門小銃及彈藥等多數なり

我砲兵の効力は頗る偉大にして捕虜將校の言に依れば昨今兩日の戰に於て敵の軍團長ザスリツチ師團長カシタリンスキーは共に負傷し其他捕虜騎兵中佐の言に依れば敵の死傷は八百以上なりと云ふ摩耶艦隊は午前十時より安東縣下流に至り敵の砲兵と約三十五分激戰の後之れを退却せしめ午後二時龍岩浦に歸れり

鳳凰城占領（黒木大將報告）

一、五月六日我騎兵斥候は鳳凰城東北に於て敵の騎兵を襲擊し死者三名負傷者數名を生せしめたり

二、同日又我が騎兵は二台子、三台子、四台子の敵を擊退し歩兵の一部隊を以て鳳凰城を占領せり報告に依れば遼陽街道沿道の家屋は多くは燒失せられたり

三、敵の退却途上に人馬逃走したる衞生材料遺棄しありたるを以て之を當軍に收容し彼我傷者の治療に使用し又た敵の衞生部員數名は其の希望に依り之を敵傷者の救護に使用せり

四、敵は鳳凰城退却の際彈藥庫火藥庫を燒きたり七日に至るも森林及び村落内等より出で來り我に投降する敵の敗殘兵續々として絶へず又た敵自ら埋葬したる墓地も尠からず土人の言に依れば去る二日擔架にて鳳凰城を通過せし敵の負傷者は約八百なりしと之に依りて見れば敵の損害は確に三千以上なりしならん

奥第二軍の行動

奥大將の率ゆる第二軍は、其の編成せらるゝや第三、第四、第六の三個師團を提げ、黒木軍の韓境を北方に進擊するに呼應し、露軍の策源地たる旅順を孤立の地位に陷らしむるの大任を帶び、神速機敏の動作を以て普蘭店を占領して先づ其聯絡を絶ち、續て南山の大激戰に於て敵の關東洲守備兵を要塞内に迫塞せしめ、茲に第一着の目的を確實に達成したり。是時に當て雄名歐亞を壓したる敵帥黒鳩公は新に精鋭三萬を以て我第二軍を擊退し、聯絡回復の計畫を爲したり、行動神速彼れ恐らくは容易に其目的を達し得べきを豫想したるならん。然るに奥軍の行動亦之に超越するものあり、露軍の南下せんとするや得利寺に邀擊して之を殲滅し、敵帥をして一時南下の企圖を中絶するの止むを得ざらしむるに反し、爾後第二軍の行動は更に確實に、當初の作戰の實行を容易ならしめたり。續て大石橋より幾多の戰鬪を經て遼陽沙河の大戰には、常に全軍の左翼となり、作戰最も巧妙を極む。立見第八師團の增加せ

らるゝや、會々敵帥の再び南下計劃を遂行せんとし、優勢なる大軍黑溝臺附近なる我左側に襲撃し來る。當時奥軍頗る難戰たりしも、方畧宜しきを得て敵に多大の損害を與へ、之を渾河に驅逐し、所謂一瀉千里の勢を以て北進したるの功績は、戰術の巧妙を著はしたるものならずや

參謀長は少將大迫尙道にして、梨本宮殿下又幕僚の一員たり

遼島半島敵前上陸戰

（奥司令官報告）

一、上陸軍は五月五日揚陸點に到着し海軍陸戰隊の掩護に依り午前八時卅分揚陸を始めし而て其揚陸には海軍援助を享くること多し

上陸點には敵兵なく土民の言に依れば普蘭店には敵兵三百名普蘭店甕子窩街道上には約百騎揚陸地の前面には約六十騎甕子窩には二三百騎ありと云ふ又電線破壞の目的を以て甕子窩に、鐵道電線破壞の目的を以て普蘭店に各々一枝隊を派遣せり

二、普蘭店に前進したる我一枝隊は昨六日午前八時普蘭店南方の高地に於て敵の騎兵七名歩兵若干あるを撃退したる後普蘭店の西南方停車場附近を占領せる約一百名の敵を攻撃せしめ之れと同時に工兵將校をして停車場南方に於て鐵道橋を破壞し且つ電線を切斷せしめたり普蘭店附近にありし敵の兵力は歩兵二三百騎兵約百なるが如し

此の戰鬪に於て我枝隊の損傷は兵卒一名の戰死同四名の重輕傷あり敵の死傷詳らかなる其歩兵十名を捕獲せり甕子窩に派遣したる我枝隊は何等の抵抗を受くることなく電線を切斷するを得たり此地に在りし敵の騎兵約二百騎にして五日朝西方に向つて退却し甕子窩電信通信所の諸機械は悉く之を持去れり

三、普蘭店に派遣せる部隊は昨七日歸還せり

普蘭店居民の言に據れば敵は該地の火藥庫に火を放ちて退却せり

又普蘭店(三十里堡(金州の北方約五里)間に於て再び交通機關を破壞する爲め一支

隊を昨七日午前出發せしめたり

四、普蘭店に派遣したる枝隊歸還後の報告に曰く該支隊普蘭店到達の際旅順方面より來りし列車内より我れを射擊せし故之に向て應射せしに彼れは止まり始めて赤十字の旗を出せり依りて射擊を中止し之を檢査せんとせしに命に從はず再び運行を始めたるを以て我も亦た射擊を開始せしに彼は普蘭店停車場にも止まらず速度を早め逃走せり

五、昨八日午後揚陸地の前面に於て我歩兵斥候は狙擊歩兵第十六聯隊乘馬歩兵斥候に出會直ちに其の二名を射殺せり

六、鐵道電線破壞の任務を有する我が一支隊は昨八日午前八時半より同じく十一時の間に於て三十里堡の東北方約一里半に在る龍口附近の敵兵百名を擊退したる後同地附近に於て鐵道を破壞し電線二キロメートル(二箇所)を切斷せり此戰鬪に於て我が戰死歩兵中尉桂勇喜下士以下三名戰傷兵卒九名

七、十二日敵狀搜索と交通機關遮斷の爲め普蘭店瓦房店(普蘭店の北方約六里半)方向に差遣したる枝隊の報告に依れば普蘭店附近に在る敵兵力は歩兵約三百、騎兵約五十騎にして其他處々に二十名内外の監視兵あり枝隊は普蘭店の東北に於て軌鐵を破壞し電線を切斷せり

八、十五日七名より成る我騎兵將校斥候は五十里堡(龍口の東北約半里)にて敵兵十餘名を襲擊し大尉一、下士卒數名を殺し七名を捕獲せり

又た若干の歩兵及び騎兵より成る一部隊は蘇家屯(三十里堡の東北約半里)に於て北行する軍用列車と戰鬪を交ゑ之を擊退し同時に龍口、蘇家屯間に於て鐵道電線の小破壞を爲せり

九、上陸軍の我が一隊は十六日午後零時卅分より十三里臺附近にある敵を攻擊して之を南方に擊退し午後三時四十五分九里庄(金州の東北約一里半)北方高地より陣家屯(金州の東方約一里半)に亘る高地を占領せり敵は退却後背金山(大和尚西麓)附近にある其砲兵を以て我に向ひ時々放火す敵の兵力は歩兵三四大隊砲八門なり其死傷詳ならず

十六日の戰鬪に於ける我が死傷者は將校以下百四十六名にして將校に死者なし負傷將校は重傷水谷砲兵少佐、小木谷歩兵大尉、板倉砲兵中尉、輕傷高梨歩兵大尉、森下砲兵大尉、菊地砲兵中尉、島田砲兵少尉、飯野歩兵少尉、小關歩兵少尉の九名なり

敵艦隊と我運送船

浦鹽敵艦隊我東郷艦隊の勢力を割かんが爲めか、頻りに我沿岸を刼掠し、或は武裝なき運送船を砲擊せり。我は上村艦隊をして之に當らしめしも、敵の武運や强かりけん、毎次敵艦隊に遭遇するとを得ず、爲に海中の藻屑となりたる將士尠からず、實に千古の憾と謂ふべし

○悲壯なる金州丸　金州丸は五月二十五日午前十一時十五分新浦附近の沖に於て敵の軍艦三隻水雷艇二隻に遭遇し空砲を放ちたるゆへ停船す、敵艦ロシヤ號近寄り來り、金州丸船長は監督官の傍に立ち英語を以て敵艦と問答を爲し、尋で監督將校海軍少佐溝口武五郎、飯田大主計、船長八木政吉、外一名は敵艦に行きたるまま歸らず、敵は一時間の猶豫を與へ人員を收容せんとせり。十二時頃には陸軍軍人の外船中殆ど人なきが如し。陸軍軍人は上官の命に依り甲板上に出でずして鎭靜せり。午後一時三十分頃敵は水雷を發射し且つ爆發藥を裝置して爆發せるが如く、水雷は船室を貫けり、茲に於て陸軍兵は甲板に登り敵に對し數列にて急射擊をなし、敵亦之れに對し砲擊し我兵死するもの多し。午後二時頃敵は第二の水雷を發射し、金州丸は機關部より二個に破壞せられ水中に陷沒せり、甲板にありて射擊せしものは一度水中に捲き込まれしも再び浮き上り多數は敵艦に收容せられ、端艇に乘り移りしものは綱を斷絶して漂流し廿六日午後五時三十分下士以下三十七名馬養島に着又他の端艇にて卒八名はライヨウカシに二十七日正午過到着し、水雷を發射せられざる以前に遁れたる人夫六、商人三と共に合計五十四名は特派汽船泰登丸に收容せられ、廿八日午後十一時元山に着せり

船内にありしは歩兵百二十九名、監督將校船員其他百六十七人にして戰死者は岡野曹長以下總て三十七名、敵に收容せられたるもの百九十八名

○萩の浦丸擊沈　敵艦隊は廿五日午前五洋丸を擊沈したる後、午後八時を以て汽船萩の浦丸を擊沈し船長以下二十一名を收容せり

○玄海洋上の慘劇　金州丸の慘事ありし後約二旬、浦鹽艦隊は突如として玄海洋上に出現し我二船を沈め一船を傷けぬ

中將ベソブラゾフは我軍の海上聯絡船を攻擊するの目的を以て六月十二日ロシアを旗艦としてグロンボイ、リユーリツクを率ひ浦鹽を解纜し、同時に水雷艇の一隊を

して北海に進擊せしむ。敵艦隊は十五日午前沖の島附近に現はる

○和泉丸の遭難　和泉丸は十二日午前十一時某地を發して宇品に航行の途中十五日午前四時壹岐沖を通過し午前八時門司を距る四十浬の海上に達す。既にして敵艦グロンボイ艦部より追來りて本船に停船を命じ發砲す、是に於て本船は進航を停止し、三隻の端艇を下し船員の多數は之に乘り本船を離るゝこと約一町にして、轟

然として一發の砲彈飛び來り本船の右舷より左舷に貫通し、次で數回の砲擊に依り白煙を揚げて沈沒せり。同船の乘組は海陸兵三名の外に船員百八名ありしが即死八名、負傷二十五名を出し、何れも敵艦に收容せらる。中に就て陸兵二名は人夫と稱し他二十名と共に十八日放還せられ帆船運鑛丸に乘じて尤も近き舞鶴に上陸せり

○常陸丸の遭難　和泉擊沈後敵艦は遙に汽船二隻を認めて之を追ふ、二隻は即ち常陸丸及び佐渡丸なり。是より先き兩船は十四日午後六時宇品を解纜し、翌十五日午前九時には白島を通過したり、此日海上極めて平穩なりしも曇天なりし爲め四五浬以外何物も見る能はず、忽ちにして濃霧を破つて一隻の巨艦現はれ黑烟を揚げて常陸に向ひ來り、停船を命せり、船長は俄に船首を轉じ爲し得る限り遁走を企てたりしも敵の追及急にして及ばず、敵彈機關部の一部に命中して進退の自由を失ふ砲擊數十發、機關部は爲めに全く破壞せられぬ、是より先き乘組の陸兵等は輸送指揮官の命に依り其居室に靜坐せしが、是に至り到底事の救ふべからざるを覺悟し、聯隊長須知中佐(源次郎)は沈痛なる訣別の辭を述べ終りたる後巨彈一發、長尾橋本

兩大尉以下十餘名の將校を倒す。五十七才の山縣少佐(俊信)は白髯を逆立て決眦敵艦を睨み腹眞一文字にカッ切り以下の將卒戰死するもの多く、而して又萬歲聲裡海中に投身したるもの數百名、渦卷く波に漂ふて悲壯の聲波に響き、悽壯悲慘殆ど言語に絕す

同船には船長英人カンベル以下乘組員總計百二十名、近衛後備步兵第一聯隊の兵士等千九十五人、外に馬匹三百二十頭、重要材料を搭載しありしが、船員は舵取以下、十六人收容せられし外總て戰死し、須知聯隊長以下七百四十二名も千古の恨を呑みて玄海の海底深く沈沒しぬ

○佐渡丸の遭難　佐渡丸は十五日午前六時半馬關海狹を通過し常陸丸と相並行して航進中同九時五十分敵艦の爲砲擊せられ續いて包圍せられ敵彈及び發射水雷各一發を受け機關部を破壞したれば遂に停止し多數の非戰鬪員を端艇に移しぬ。敵は信號もて非戰鬪員は去るべし、戰鬪員は此方に來るべしと命じたれば、監督將校小掠海軍中佐は談判の爲め單獨敵艦に赴きしが其儘歸らず

小掠中佐と行違に敵少佐は兵十餘名を率て佐渡丸に來り四十分間の猶豫を與ふるを以て退去すべきを命ず。是に於て一同覺悟する所あり輸送指揮官田村工兵大佐一同を甲板に集め沈痛悲壯の訣別をなす、即ち或は海中に飛び込む者あり或は墜落するあり、附近の海上人を以て埋めらる。既にして敵は砲彈及び水雷を發射し佐渡丸は損傷部よりの浸水甚しく、將校以下　陛下の萬歲を三唱し軍刀又は拳銃を以て最後の準備を爲しつゝありしに、敵艦は更に第二の水雷を發射し機關部に命中せるを見て急に北方に向て退却せり

茲に於て一同意を飜し爲し得る限り避難するを得策とし、鋭意急造筏の製作と浸水の防遏とに從事し、尙且不良なる天候に苦められつゝ三十時間海上に漂流し、各々救助船に收容せられ、船は高砂丸に曳かれ十八日六連島に歸着しぬ

乘組總計千六十九名、內七百九十八名は鐵道作業局派遣員なり

此他往復中の諸船は砲擊を受けたるものありしも皆無事避難するを得たり

我艦艇の沈没

開戰以來敵の主將とその艦艇に大破を與へし我艦隊は一艦一艇も失はず、人をして奇蹟の感を懷かしめしに、海戰の大局決したる此頃、我は不幸にして數多の艦艇を失へり

○水雷艇及宮古艦の爆沈　五月十二日第四十八號、第四十九號の兩水雷艇は大窪口東岸に沿ふて掃海中、午前八時黑嘴子の南南西二分一西約八鏈の地に於て敵の機械水雷を發見し、百方之が爆沈を勉めしも其効なきを以て艇を後退せしめ更に爆沈を試みんとして作業中、正午過二十七分該水雷俄然猛烈なる爆發をなし、爲めに第四十八號艇は兩斷し約七分時にして沈沒の不幸を見るに至れり。各艦は直に救助艇を出し、附近にありし水雷艇と共に其救助に盡力せしも終に十四名（內戰死七名）の死傷者を出せり

十四日の作業は極めて無事に進行し、午後四時三十五分、夕陽漸く海面に金波を起す

すの時、艦艇は其放てる掃海艇を收容せんとするに當り、敵の機械水雷不幸にも宮古の左舷艦尾に觸れ忽然爆發して艦體に大破を被らしめ、死傷者二十四名（內戰死下士卒二）を出し艦體も亦二十三分時の後遼東の海底深く沈沒したり

○花の吉野艦　五月十五日、噫何ぞ夫れ此日は我海軍に最大不幸の日なる曉の霧深き中早くも吉野の花を散らし、午前十一時には初瀨八島の二大良艦の沈沒を見る、噫一日三良艦の喪失、何ぞ變炎の相次で至るや。五月十五日午前一時四十分頃第三戰隊は旅順港封鎖の任務より歸航中、三東角の北方海面に於て濃霧に遭ひ、春日は吉野の左舷艦尾に衝突し、吉野は浸水甚しく終に沈沒せり。春日笠置より出したる救助艇にて收容されたる者將校六名准士官一名、下士以下九十七名にして其他三百二十三名は悉く俱に戰死せり。特に艦長佐伯大佐は最後に至る迄屹然として司令塔にあり從容迫まらず命令し、艦と共に其運命を俱にしたり。吉野は明治二十五年英國にて製造四千二百廿五噸、速力二十三節の快速巡洋艦なりき

○紅葉の初瀨艦　初瀨、八島、敷島、笠置、龍田は十五日封鎖監視の爲め第

三根據地を出て鳩灣より嶗崔嘴方面を監視遊戈し、午前十一時頃老鐵山の南東約十浬の地點に至りし時初瀨は敵の水雷に罹り先づ舵機を破られ將に曳船を發送せんとするとき更に第二の水雷に罹り終に沈沒せり、附近にありし諸艦は迅速に應急の準備に着手し艦員の救助に全力を擧げ、幸にして司令官梨羽少將、艦長中尾大佐以下將校十六名、士官候補生三名、准士官五名、下士卒三百十七名を救助收容し、（內百二人負傷）其他四百九十四人は根を呑で戰死せり、初瀨は一萬五千餘噸、三十四年英國にて製造し、廻航以來僅に四年の短命を以て逝けり

○八島の最後　初瀨の沈沒後一二分にして戰艦八島も亦九百餘の健兒を乘たる儘敵の機械水雷に觸れ大爆聲と共に煤烟に包まれたり、煤烟散じたる後艦體は依然として浮び、其墻頭には曳船たのむとの信號飜れり、三笠は卒急之に向ひ曳船の準備を整へ遭難の地點を跡にし南西の方面に向て航行す、此間艦員死力を盡くして排水と應急修理の法を盡せしも水雷爆發の爲め蒙れる損傷は實に巨大にして、各區の防水扉は爲に將に破れんとす、航行約二時間にして老鐵山の西南約二十海里の地點に達せる頃、浸水到底防ぐべからず漸次沈沒し來るを以て艦長坂本大佐は聖影を他艦に移し奉り、軍艦旗其他重要書類を他に移すべきを命じ、艦員一同を笠置龍田に移乘せしむ。其軍艦旗を卸すに當りては服裝を改め上甲板に整列して君が代を唱へ　天皇陛下及日本海軍の萬歲を連呼し、無念の涙禁ずる能はず、無限の感慨を以て之を凝視する間に艦は僅かに三分にして全く沈沒し去れり

是より先き敵は我艦隊の通路同一地點なるを視、常例航路に直角をなして、長さ一浬の間周到なる注意を以て約百二十呎宛の距離を保て五十の水雷を沈設し、而して我は遂に之に接觸せしなり

○敵驅逐艦の來襲　初瀨の沈沒せんとするや敵の驅逐艦十六隻は機乘すべしとなし、ノーヴックに掩護せられて旅順口內より出で來り我を追尾せり、是に於て第一艦隊は沈沒艦の乘員救助に着手し、折柄來りし東郷少將の率ゐたる明石、千代田、秋津洲、大島、赤城、宇治及高砂の諸艦と協力して之を擊退したり

○大島の沈沒　五月十八日砲艦大島は後記の如く東郷少將指揮の下に陸軍と

共同作戰の目的を以て遼東灣に游弋中、同夜僚艦と接觸して沈沒したり。大島は二十四年小野濱に製造したる六百三十噸の砲艦なり

○曉艦の沈沒　强行偵察は敵の砲火を冒し敵港口に肉薄して作業に從事するものにして其困難にして且つ危險なる固より閉塞隊の壯擧に讓らざるものあり。而して之が第一回は第三回閉塞に當り風浪險惡、爲めに所期を達する能はざりし諸勇士を網羅して決行せられしが驅逐艦曉は五月十七日夜敵の機械水雷に觸れ沈沒せり五月二十日午前一時我砲艦の一隊及驅逐艦、水雷艇の數隊は旅順港口に迫り、要塞の猛烈なる十字砲火を冒し强行偵察を試み其目的を達し、天明に至り引揚げたり。當時我砲艦隊に多少の被彈ありしも損害著からず且つ死傷を出さゞりしが、驅逐艦曙は敵の破裂彈を被むり、艦長末次大尉（直次郎）以下二十四名戰死したり

○海門の遭難　軍艦海門は七月五日特別任務を帶び作業中濃霧に會し大連灣外に於て敵の機械水雷に觸れ破損沈沒せり艦員の大部分は救助收容せられたれど艦長高橋守道、主計長塚原喜八、掌砲長松下善之丞外下士卒十四名は生死不明なり艦長

は總員に退去を命じたる後部下の勸告せしにも拘らず退艦乘艇を固辭し最終まで艦橋に止まり遂に本艦と其運命を共にせしが如し

金州南山の占戰

攻擊又攻擊、閉塞又閉塞、我が軍の奇術壯烈を爲すと雖も旅順要塞は天險に加ふるに有らゆる人工を施したるもの、これを海の一方よりして落すべからず、且つ背後の鐵路は敵陸軍の根據地たる遼陽奉天方面と通じて、兵馬物資の供給を怠らず。若夫れ敵兵南下の道を杜絕し、旅順を釜中の魚たらしめて我が陸海軍の活動を敏活ならしめんには必ず先づ金州を占領して南山の險を手に入れざるべからず。果然奧軍は金州南山に向つて驚天動地の活劇を演じ、激鬪奮戰十六時間、海軍又之に應じて、金州を占領し、南山を攻略せり。その大要は左の報告に見よ

（攻擊軍司令官奧大將報告五月廿八日午後九時五分大本營着電）

軍は豫定の如く二十五日を以て攻擊準備を了り同二十五日夜半より運動を起し第四師團を右翼に第一師團を中央に第三師團を左翼に並列し金州南山に向て前進せしむ

此夜迅雷風雨咫尺を辨せず運動頗ぶる困難なりき同時一部隊を以つて金州城を攻落せしむ二十六日午前四時三十分放火を開始すべき筈なりしも濃霧の爲め五時三十分全砲兵は內山少將の指揮を以て南山に向て砲擊を開始し同六時頃より我艦隊の四隻は金州灣より此砲擊を援助せり敵は全備砲を以て之に應戰し茲に激烈なる砲戰を交ゑ約三時間の後南山の敵火大に減衰せり是に於て各師團の步兵は前進を起し一進一止し敵の砲火を侵し敵の第一線を距る約三百乃至五百五十米突の地に達したり

午前十一時敵の露天砲は我猛烈なる砲火に依り悉く沈默せしも速射重砲戰二中隊は疾く退却して南關嶺の高地に據り終局に至る迄時々我を射擊せり午前十時頃敵の砲艦一隻和尙島砲臺東方に來り午後二時頃まで我第三師團の左側背を攻擊し且つ小蒸汽艇五艘に搭載せる陸戰隊を紅土涯附近に上陸せしめんとせしも我一部之に向ひしを以て遂に歸還せり又た南山南方大房身に在る敵の九珊米砲四門は午後七時頃まで

我第三師團に向て砲擊を繼續せり我左翼に在る砲兵之と應戰せしも距離遠くして十分の効力を現はす能はず

敵の占領せる南山の陣地は嶮峻なる高地線に半永久築壘を施し大小砲約七十門機關砲八門を具へ連續圍繞せる數層の砲壘線には銃眼を穿ちたる掩蔽部を作り其前方には多數の地雷及び鐵條網を設け且つ此間隔を補ふに多數の機關砲を以てせり之れに對する我砲兵は全力を擧げて之れが破壞に努力し又た屢々陣地を交換して敵に近接し以て步兵の前進に勢力を與へたりしも敵步兵の抵抗は頗る頑强なりしを以て午後五時に至る此時我步兵の爲め未だ突擊の進路を開くに至らず

又た我左翼に在る第三師團は敵の包圍を受くるのみならず敵は漸次步兵を左側前に增加し且つ南關嶺に在る敵砲兵二中隊は此攻擊を援助し益々師團の左側に迫らんとす而して我が携行砲兵彈藥は將さに盡きんとし戰鬪を永く繼續すること能はざるに至れり依りて止むを得ず步兵をして損害を顧みず强襲を行はしめ砲兵は補充し得る彈丸を盡して敵を猛射せしめたり我第一師團の步兵は意氣衝天の勇を鼓し敵陣に向

ひ突擊せしも敵の猛烈なる敵射と側射とに依り多數の死傷者を生じて前進を繼續することを得ず頗る苦戰に陷ゐりしが恰も好し此時金州灣に在る我艦隊は敵線の左翼に向て更に猛火を開き砲兵第四聯隊に協力し敵火の撲滅を努め第四師團は此機に乘じ全力を擧げて敵の左翼に迫り先づ高地線に進む是に於て第一及び第三師團は之に協力し全線を擧げて勇奮突入し累々たる死屍を越へて敵壘に肉薄し劒尖相接するに至るまで激戰して遂に南山を攻落して各砲壘上に國旗を飜へせり時に午後七時過ぎなり

敵は潰亂して旅順方向に退却せり此退却に當り敵は大房身の火藥庫を爆發したり

軍は一部を以て敵を追擊したる後全隊戰場に露營す此時士氣大に振ひ萬歲の歡呼諸方面に起り砲兵は全力を盡して敵を追擊す我に對せし敵の兵力は野戰軍約一師團野戰砲兵二中隊要塞砲兵海軍兵若干なり察するに敵は旅順及び大連灣を掩護する爲め爲し得る限り南山の陣地に據り我が前進を防止せんことを努めたるものにして猶ほ其防禦工事を增加するの計畫ありしが如し

敵の死傷は不明なるも戰場に遺棄せし死體のみにても五百名に下らず捕虜は將校以下若干名又戰利品は砲約六十八門機關砲十門發電用蒸汽機關一箇電氣燈三箇ダイナモー一箇地雷鐵管約五十五個其他小銃及彈藥詰材料等なり我軍死傷將校以下約三千五百名終りに臨みて海軍の有力なる援助に對して深く其好意を謝す

大連灣占領

（五月廿八日午後大本營着電 奥大將報告）

二十六日我に對せし敵は歩兵第三、第四、第五、第十二、第十三、第十四、第十六聯隊、關東要塞砲兵、鐵道護境兵五中隊(?)及若干の海軍兵なるが如しと其兵力は未だ詳かならず

右の敵兵は廿六日夜三十里堡に宿營し夜半より汽車にて旅順方向に退却せし者の如く目下前革鎭堡以東に其跡を止めず又黃山砲臺には敵兵もなく備砲もなし

中村支隊に屬する一部隊は廿七日柳樹屯を占領し同地に於て火砲四門、同彈藥若干、

鐵道貨車（有蓋五、無蓋四十一）を鹵獲せり

賽馬集占領

（六月九日午前大本營着電 黑木大將報告）

我一部隊は本月七日賽馬集附近に在りし敵を四方泣方向に擊退して午後三時賽馬集を占領せり同地に在りし敵は步兵一大隊と砲二門なり我損害は戰死卒三、負傷下士卒以下廿四名敵の損害は戰場に遺棄せし死傷廿三、捕虜將校二、卒五其他土人の言に依れば敵の將校二、下士卒七十負傷せりと

川村獨立師團大孤山上陸

第十師團長陸軍中將川村景明、後備第十旅團をも合せ帥ゐて、五月十九日南尖灣に上陸し大孤山を經て第一軍なる近衞師團の一部と合して、直に岫巖を略したり、之を大孤山上陸軍と呼ぶ

我一部隊は昨八日午後大虎嶺附近に於て敵を擊破し同五時二十分大孤山上陸軍の一部隊と共同して岫巖を占領せり敵は兩部隊の前面に在りし者を合せ騎兵約四千砲六門にして析木城及び蓋平方向に退却せり

得利寺の激戰

（六月十八日午後六本營着電 奥大將報告）

六月十三日軍は普蘭店大沙河の線を出發し右縱隊を大沙河に沿ひ中央線隊を鐵道線に沿ひ左縱隊を吳家屯（復州街道上）四川溝大河蛭に通する道路に沿ひ騎兵部隊を魏子窩熊岳街道を前進せしめ各縱隊は其進路上の少數の敵兵を驅逐しつゝ前進せり十四日左縱隊は那家岑附近に達す右及中央縱隊は相連繫して得利寺南方約十二吉羅米突の趙家屯大平溝の線に達し敵兵大房身より北部龍王廟に亘る線を占領するを知り更に進んで王家屯龐家屯龔家屯の線を占領し午後三時頃より日沒に至る迄砲戰を繼

續せり

十五日軍は得利寺附近の敵を攻擊せんが爲め右縱隊をして宗家屯より温家屯北方高地に亙る線を固守せしめ中央縱隊をして夜間を利用して虞家屯附近より大陽溝西方高地に前進せしむ此朝濃霧あり五時三十分砲火を開始し砲戰漸次激烈と爲りつゝある間に中央縱隊の復州河以北の地區は漸次苦戰に陷ゐりたるも其攻擊前進は着々進捗し加ふるに今日黎明復州方面より急行せる歩兵及砲兵より成る一隊は午前九時三十分王家隊西方高地に達し中央縱隊と協力し午前十一時大房身附近の敵を驅逐するを得たり然れども龍潭山山嘴及龍王廟高地に在りし敵砲兵は猛烈に此方面を射擊し中央縱隊及復州方面より來りし一隊は此猛火を侵し嶮崖峻坂を攀登して前進せるも右縱隊の右翼隊方面の敵兵は依然優勢を以て我に當り屢々攻勢に轉せんとせり因て軍の總豫備隊たる歩兵を前後二回此方面に增加す是より先き右翼隊の方面危急を告ぐるに當り騎兵部隊も又た右縱隊の右翼に到着し之に連繫し猛烈に敵の左側背を脅威せしめたり敵は全く我が包圍中に陷ゐりしも頑强にして屈せず併かも敵の後續敵

戰場に到着したるが如く屢々逆襲を以て戰況を挽回せんとせしも遂に我軍の攻擊力に抵抗する能はず午後三時頃より退却を始め我が追擊射擊に因り潰亂せしも軍は地形上猛烈なる追擊を行ふを得ず此夜戰場に夜を徹せり

此日左縱隊の主力は高家屯附近に於て北方に對し陣地を占領し軍の左側を掩護しありしが午前十時五十分敵の歩兵約七八百馬家房身より西龍口を經て吳家屯方向に退却するを知り歩兵二中隊砲兵一中隊を紅家屯東方高地に差遣して之を待ち午後一時後に至り敵兵豫想の如く龍口後以西に退却し來るを以て大に之に損害を與へたり

此日戰鬪に參與せし敵の兵力にして始めより陣地に在りしものは歩兵廿五大隊騎兵十七中隊砲九十八門なるも戰鬪間更に後方より增加せし部隊あり敵の死傷未詳なるも戰場に遺棄せし死屍は右縱隊方面のみにて約六百にして軍旗及砲十四門等を鹵獲し捕虜は第四聯隊長以下將校下士卒三百なり又た捕虜將校の言に依れば第一軍團長輕傷第一師團長重傷第一聯隊長戰死第二第三聯隊長負傷せりと我軍の死傷目下取調中なるも千名以下なり

十五日の戰鬪は兵力約二師團半然かも堅固なる陣地に據るの敵を攻擊し遂に之を潰走に至らしむるを得たるは單に　陛下の御稜威に因る

熊岳城占領

（六月廿二日午前大本營着電　遼東半島上陸軍報告）

六月廿一日午後我軍の一部は熊岳城を占領せり

滿洲軍總司令部の出征

征露軍總司令部組織せられ司令官參謀長左の如く補せらる

補滿洲出征軍總司令官	元帥陸軍大將正二位大勳位功二級侯爵	大山巖
補滿洲出征軍總參謀長	陸軍大將正三位勳一等功三級男爵	兒玉源太郎
補參謀總長	元帥陸軍大將正二位大勳位功二級侯爵	山縣有朋
補參謀本部次長	陸軍少將正五位勳四等功四級	長岡外史

大山總司令官、兒玉參謀長以下滿洲軍總司令部は七月六日を以て東京出發大山元帥兒玉大將の出征に付き參謀總長次長の後任

旅順艦隊の突出

（六月二十四日東鄕聯合艦隊司令長官報告）

六月二十三日午前十一時旅順口外にある哨艦より無線電信を以て敵艦「ペレスウエート」外七隻、驅逐艦九隻港口附近に出づとの報告に接し特別任務に從事するもの〻外總艦隊を擧げ發進す敵は戰鬪艦六隻、巡洋艦五隻、驅逐艦十四隻にして南下を試みんとするもの〻如くなりしも日沒後に至り港口外に假泊せり

昨夜我驅逐艦水雷艇の大部分は旅順港口に於て敵艦隊を攻撃し少なくも「ペレスウエート」型戰鬪艦一隻は轟沈したるものゝ如く「セバストポリ」型戰鬪艦一隻「デアナ」型一等巡洋艦一隻は今朝曳かれて港内に入るを見たりとの報に接したれば多分大損害を受けたるものならん我艦艇には大なる損害なく驅逐艦白雲は敵彈の爲め士官室を破られ戰死下士卒三名、負傷海軍少軍醫宮川正雄外二名を出だし千鳥は後部汽罐室に一彈を受けたるも死傷なし又第六十四號水雷艇、第六十六號水雷艇には少許の損害あり其他は皆無事なり

「備考」 敵は損傷せし戰鬪艦以下には應急修理を施し又港口閉塞は辛ふじて戰鬪艦を通過し得る程度に開通したるものと認む

分水嶺占領

（六月廿九日午前大本營着電 大孤山上陸軍）

軍は分水嶺占領の目的を以て三縱隊となり二十六日より其行動を開始せり淺田支隊は揚畔溝より分水嶺に鎌田枝隊は大桑峧峪より敵右翼丸井枝隊は接官听より迂回して敵の右翼背に向ふ同時に東條枝隊を以つて丸井枝隊の背後を掩護せしめたり東條枝隊は此任務を以て前進し二十六日上哈嘆、同家庄の線を占領せる敵を攻撃せしに該地の敵は步兵約三大隊砲六門機關砲二門を以て固く陣地を占領しあり該枝隊は今日午前五時より敵に對戰して夜に入り戰鬪隊形の儘露營せり二十七日午前夜半より東條枝隊は更に攻撃に着手し遂に之を撃退し其陣地を占領せり然るに敵は同日午後に至り步兵約三大隊砲十六門の增援を以て屢々同枝隊の奪取せる陣地の回復を試みしも之を撃退し午後七時半迄砲戰を續けたり丸井枝隊は二十六日夜接官听に達し一部隊を以て下哈塔の敵（東條枝隊に對せしもの）の側背に迫らしめ主力は二十七日午前三時より分水嶺に在る敵の脊後に迂回する爲め前進せり然るに二道溝附近に在りし敵の步兵約二大隊の爲め抵抗を受け午前十一時之を撃攘して三道勾に達せり

淺田枝隊は二十六日王家堡の附近を防禦せる敵の步騎兵約二千を撃退し同夜瓦房店

(分水嶺東麓)以南にて夜を徹し二十七日午前五時より先づ砲戰を開始せしも敵は堅固なる砲臺内に於て巧に應戰し殊に既知の射距離を以て彈雨を集注せしを以て我砲兵は一時苦戰せり

恰も好し二十六日夜半より敵の右翼に迂回せる鎌田枝隊は弟兄山(分水嶺の南)腹を守備せる敵の歩兵約二中隊を擊攘し午前七時以後辛ふじて砲兵を同地に配列し全く側面より分水嶺の敵を縱射し歩兵は弟兄山中より續々敵の側背に迂回せり

又淺田枝隊より派遣せし深谷聯隊も二十六日夜半より運動を開始し午前七時揚畔溝西方高地に在りし約二中隊の敵を擊攘して敵の左側背に迂回せり茲に於て敵は全く其行動の自由を失し午前七時五十分其砲兵先づ沈默し同じく八時頃より全線の動搖を始めたり

敵の正面に向ひし淺田枝隊の歩兵は工兵の援助を以て敵の副防禦を破壞しつゝ前進肉薄し午前十一時半分水嶺山頂を占領し砲兵を以つて猛烈に敵を追擊せり

敵は松坨子に在りし糧秣倉庫を燒棄し潰亂して柝木城方面に退却せり

捕虜將校六、下士卒以下八十二、敵の遺棄せし死體は山間溪谷に點在し其數を判別し難きも本道上に遺棄せしものゝみにても九十を下らず

柝木城街道附近に於ける我戰死將校は大庭歩兵少佐にして其他死傷下士以下約百二十名東條枝隊にては約五十名なり

分水嶺の陣地は柝木城街道の關門として約三箇月間敵の全力を盡して構成せし半永久築城なるを以て砲臺、歩兵、塹、濠、廠舍、交通路、露營の設備等完備せり云々

水雷艇隊の奇効

(七月二日東郷聯合艦隊司令長官報告)

第十二水雷艇隊(司令海軍少佐山田亨)は六月二十七日夜旅順港外にある敵の哨艦に對し攻擊を行ひたり其報告に依れば同夜我艇隊は旅順口港外に進航せしに敵の窺知する所と爲り探海燈の熾なる照射と砲臺軍艦の猛烈なる射擊を冒して黄金山下にある二檣三煙突の敵哨(戰鬪艦又は一等巡洋艦ならん)を襲擊せしに該艦は水柱を揚

げて轟沈せり此時敵の驅逐艦は我を攻撃し來りしを以て之と砲火を交へたりしが其内一隻は艦腹を現はし白煙を揚げながら轉覆沈沒せり

此の攻撃中戦死海軍大尉樓藤熹義以下十三名負傷海軍中尉矢野祐太郎以下二名なり

摩天嶺の逆襲

七月四日黒木第一軍の前哨線に對し、敵兵逆襲を試みしが終に撃退せり。十七日軍團長ケルレルの指揮する狙撃第二第三及歩兵第九師團大擧して再び逆襲し來る。岡崎少將等此大敵に對し、頗る勇敢に戦ひ、終に之を撃攘せり

浦潮艦隊太平洋に來る

浦潮艦隊三隻廿日午前三時三十分津輕海峡と陸奥の西北沿岸を東に向け通過せり

敵艦三隻太平洋に向け海峡を通過したり（龍飛岬救難所發電二十日午前十一時）

津輕海峡東口に於て露艦より臨檢せられし汽船は放たれて室蘭方面に向ひたり又露艦三隻は其後東南に向つて進行し遂に其影を失へりと（二十日午前或筋着電）

右三艦は伊豆沖に至りて更に浦潮に歸航せるものゝ如し

營口占領

（七月廿七日午後大本營着電　奥大將報告）

軍の一枝隊は二十五日營口を占領せり營口停車場の諸建築物は悉皆破壊せられ同地に在りし露國船舶は凡て遼河上流に免れ其守備兵は東北に退却せり又遼河には中立國船舶自由に出入しあり

大石橋の激戦

（七月廿八日午後大本營着電　奥大將報告）

七月廿三日午前四時軍は蓋平附近の陣地線を出發す各縱隊は共に少數の敵を撃退し

て流家溝より花兒山を經て五臺山附近に亘る線を占領せり此日軍の左翼方面には騎砲兵各一中隊を有する敵の步騎兵若干部隊ありて屢〻抵抗せり

軍は占領したる陣地内に開進し戰備を嚴にして翌日に於ける總攻擊の準備を爲せり

廿四日未明軍の右翼たる諸團體は相連繫して運動を起し太平嶺及び其西方百八十の高地及び其西方の地區に向ひ前進し午前八時頃羊草勾北方高地より標高約百八十の高地を經て孫家屯北方高地の東側に亘る線を占領す此時敵の砲兵は太平嶺、遊汗溝、鄭家溝附近の高地より盛んに我に向つて射擊す我砲兵は地形困難の爲め未だ充分之に應戰し得べき陣地に進入すると能はざりき茲に於て步兵は掩護して陣地を占領し暫く時機を待つに至る

軍の中央團體は右翼諸團體の攻擊進捗に伴ひ花兒山附近にある砲兵の援助を受けつゝ前進し午前十時頃孫家屯北方高地を占領せしも青石山、望馬臺間にある多數の敵砲より猛射を受くるを以て此より前進を繼續せず以つて右翼團體の前進及び我砲兵の近接を待つに至れり

軍の左翼團體は始め五臺山附近の陣地にありしが其右方に併列せる諸團體の攻擊進捗を見るや午前九時其第一線を以て牛家屯、劉白塔寺の線を占領し其砲兵團は太平庄附近に陣地を占め盛んに望馬臺附近の敵砲兵と射擊を交換せり

敵の本陣地は右翼牛心山附近より青石山を經て太平嶺附近一帶の高地に亘り連綿せる高地に數多の防禦地區を形成し其高地は全く我攻擊地帶を瞰制し廣濶遠大なる射界を有し數層の堅兵壕には銃眼を穿ち掩蓋を作り且所々に鹿柴、鐵條網、地雷を設け野戰的防禦工事幾んど完成せり殊に其砲兵は巧みに氣形を利用し遮蔽陣地を占め我をして殆んど其位置を判斷するに苦しましむ此に對し我砲兵陣地は到る所不利にして敵眼に曝露し而かも其進入は極めて困難なり然れども各方面の我砲兵は困難を冒して屢〻陣地を變換し以つて步兵の攻擊を援助するに努めたるも地形斯くの如くなるを以つて我砲兵は非常なる苦戰に陷り死を盡して奮發するも其効力不充分にして敵砲を沈默せしむるに至らず軍司令官は他迂攻擊を遂行せんとし右翼團體に損害を顧みず突擊前進すべきを命ず團體は猛烈なる敵の砲火を冒して前進せしも地形不

利にして敵の本陣地の一部だも奪取するに至らずして日没となれり殊に比隣團體の一部の如きは非常の勇氣を以つて一度敵陣地に突入せしも其陣地頗る堅固にして然かも優勢なる敵に逆襲せられ再び舊位地に引退するの已むを得ざるに至れり

狀況斯くの如にして彼我の砲聲は日暮と共に自然に中止せられたり但し敵の砲兵の一部は午後九時迄時々我に向ひ捜射せり右翼團體の司令官は軍司令官の意圖を實行する爲め遂に夜襲を行ふの決心を採れり軍司令官は此處置を是認せしを以つて右翼團體の司令官は午後十時頃より其歩兵の大部を擧げて斷然之を決行せり該團體の歩兵は猛然として勇進太平嶺附近の堅固なる敵陣地に突入し遂に其第一堡壘を奪取し多數の損害を被りたるに拘はらず更に勇を鼓して第二堡壘に突進して之を占領せり時に廿五日午前三時なりき

右翼團體に隣接せる諸團體も亦之に續き山西頭附近の高地を占領す

翌天明と共に臥龍崗附近にある我砲兵は先づ當面の敵に向ひ砲擊を開始せり然るに敵情後日と異なるを以つて臥龍崗附近に在りし團體は直ちに後進して青石山を占領

せり左翼團體は右の狀況を知るや直ちに前進して牛心山、橋臺舖の線を占領せり

騎兵は軍の左側にありて行動し騎砲兵を有する優勢なる敵騎に對して能く我側背を援護せり

敵の主力は大石橋街道より一部は其東方より海城方向に退却し其後備は我砲擊を受けつゝ午前十一時過大石橋を通過せり軍は各縱隊の先頭部隊を以つて之を追擊し次で大石橋及其附近を占領せり、

我に對せし敵は第一、第二、第九、第卅五師團及び西伯利豫備師團に屬する部隊にして其砲數は約百廿門なるが如し

捕虜將校の言に據れば滿洲軍總督クロパトキンも戰場に在り而してサワロフ中將、コンドラドウイッチ少將負傷せりと又諸情報を綜合すれば敵の死傷は少くも二千を下らず我死傷將校以下千名内外なり戰利品及び捕虜若干取調中なり

敵は我追擊の爲め頗る狼狽を極めて退却せり察するに敵は青石山附近の陣地を堅固に占領し此處に決戰を爲さんと企てたるものゝ如し然るに夜半に至り俄に退却を決

行しなるの形跡あり其原因は我右翼の强襲に依り彼の左翼守りを失ひしが爲めなるが如し

野津第四軍の行動

第四軍司令部は三十七年六月二十五日を以て動員、東京に於て編成せられ、大山總司令官出發一日後即ち七月五日東京發征途に上れり。是より先き川村中將（後鴨綠江軍司令官）は第十師團及び後備第十旅團を帥ゐて南尖灣に上陸し、大孤山を經て近衛師團の一部と合して岫巖を略したり。野津司令官以下幕僚茲に到着し第五師團を之に增加し、析木城攻擊に當つて始て指揮を司り、第二軍の前進に有利なる狀況を與へて之を擊破占領せり。續いてマホヤ山鞍山站の諸戰を經て遼陽戰鬪に加はれり。本戰鬪に於ては第一軍第二軍の中間に介在し山路行進最も困難を極め、遂にユイハンシャオの堅固なる堡壘を突破して敵に動搖を起さしめ、遼陽占領に一大動機

を與へたり。沙河戰鬪に於ては後備第一、第十一の二個旅團を增加し、三塊石山に最も苦戰し爲めに部下なる丸井、兒玉（軍太）の兩將軍先づ傷つき、安村聯隊長之に死し、久能聯隊長負傷するの慘況を呈したるも、此占領は全般の作戰に對し非常に有利なる効果を奏し、黑溝臺會戰後に於て第五師團と第十旅團を第二軍に編入し、第六師團之に代れり沙河を挾んで冬營し、續いて來れる奉天會戰にも亦中央軍と成り、第四師團後備第一、同第八、同第十、同第十一の各步兵旅團、內山砲兵旅團、村岡徒步砲兵聯隊幷に旅順に於て敵艦を殲滅せしめたる二十八珊砲六門をも併せ頒强數日に亘る敵の抵抗を擊破し、渾河を渡りて奉天東方に進出し、東北方より奉天城を包圍し捕虜戰利品頗る大なり。此時第四師團及後備第八旅團は序列を離れたり。

析木城占領

（八月二日午前大本營着電析木城攻擊軍報告）

軍の前面に在る敵は紅窰嶺北方高地より蓋三縣を經て三角山東方高地に亘り堅固な

る防禦工事を爲し紅峯嶺南方高地には砲兵肩墻を見る又老達子附近に約三大隊の敵兵あり軍は此敵に對し去七月三十日を以て大房身西方高地より下八岔溝北方高地に亘る線を左翼隊を以て賈家堡子南方高地より英落山西南方高地に亘る線を占領せり翌三十一日拂曉軍は主力を以て三角山東方高地の敵に向ひ左翼隊を以て東西楊樹溝北方高地の敵に向ひ攻擊を開始し左翼隊は午前八時頃東楊樹溝東北方標高三百四十五米突以西一帶の敵陣地を攻落せり然るに二道溝方面に在りては敵益々其兵力を增加し其砲兵は約二十一門に增加せしも我左翼隊は新に來着せる一枝隊と協力し猛烈なる砲戰の後之を攻擊し午後三時の頃遂に之を北方に擊退せり軍の主力は午前十時三十分の頃太平嶺西方高地の敵陣地を攻落するを得たるも窪三及び小房身東方高地に在る敵砲兵より猛烈なる射擊を受け前進を繼續する能はず其後敵は漸次新鋭の兵力を增加し午後五時半頃に至り全線攻勢に轉じ來れり我歩砲兵直に之を擊退し敵に多大の損害を與へしも敵砲の猛射の爲め追擊する能はず遂に近く相接して夜を徹せり

是より先き我左翼隊は敵を擊退し其退路に迫りしを以て敵は夜暗を利用し逐次其陣地を撤し海城方面に退却せり

敵は數箇月を費して築造せる堅固なる防禦陣地に據り特に速射野砲を猛射し我砲兵を苦しめ大に攻擊に困難を感せしめたり我軍の死傷約四百名にして敵は死體約百五十を戰場に殘し退却せり

我に對せし敵は歩兵約二師團、砲兵約七中隊なるが如く而して中將アレキセーフ(歩兵第五師團長)之を統率せり

鹵獲品野砲六門捕虜若干此日炎熱酷しく正午室外華氏百二十度に上る

海城牛莊の占領

(八月四日大本營着電 奥大將報告)

昨三日來敵は北方に退却を續行す軍は三日正午頃海城及び牛莊を占領す

我五艦の喪失

○速鳥の沈没　封鎖任務の困難なること特に喋々を要せず我艦隊は人力の及ぶ限を盡し愼重任務に服せしが、又も五艦を失ふに至れり、驅逐艦速鳥は九月三日旅順口封鎖に從事中敵の機械水雷に觸れ、忽ちにして沈没したり、戰死十九名

○平遠の悲慘　軍艦平遠は九月十八日鳩灣方面に於て哨艦任務に從ひ慘絶なる運命に遭遇したり、此日薄暮に至り天候險惡の徵を呈し風雨强盛となりしが、遙に沖合に一隻のジャンクを發見し、之を追廻して取調べ規定の手續を了へたる後再び舊針路に轉せんとしたりし途中に於て、敵の浮流機械水雷忽然同艦の右舷中央部に觸れて爆發し、四邊暗澹たる光景の裏に僅に四五分の後全く沈没したり、衆皆意を決して自ら海中に投せしが、其多くは遂に怒濤に堪へずして戰死せしものゝ如し

○愛宕の沈没　十一月六日僚艦と共に封鎖勤務に從事中、直隷海峽に於て暗礁に觸れ沈没したり、同艦は明治二十年横須賀に進水したる六百十二噸の二等砲艦

なり

○濟遠の悲劇　濟遠支隊は旅順口敵要塞に接近して陸軍に應援並に封鎖强行中十一月三十日突然敵の機械水雷に觸れ艦隊黑煙に包まれたり、是に於て陸上を砲擊しつゝありし赤城は直に之を中止して濟遠の方に向ひしに、忽にして同艦沈没せしを以て赤城は其附近に投錨し、他の砲艦及び汽艇と共に極力遭難者の收容に務め、濟遠副長を始め准士官以上十五名下士卒百七十五名を救助し得たるも、艦長但馬惟孝氏以下三十八名は終に戰死したり

濟遠は長く同支隊の指揮を司り、屢々危險の地域を往來して克く其功を奏しつゝありしに、計らず此奇禍に罹りしは實に痛惜に堪へざる所なり

○高砂の沈没　巡洋艦高砂は十二月十二日夜旅順口封鎖に勤務中、敵の機械水雷に觸れ忽ちにして沈没したり。艦長以下戰死するもの頗る多し。同艦は明治三十年英國にて製造し、五千百六十噸二十三浬の速力を有せし二等巡洋艦なりき

遼陽の大決戰

日露役に於ける彼我主力の大決戰は實に遼陽の大野戰を嚆矢とす蓋し遼陽は滿洲に於ける露軍の一根據地、其の防禦工事は長時日に亘りて之を施設し、此處に集中せる兵力凡そ〇〇萬、總指揮官黑鴻公自ら之を統率し、防備嚴にして人馬備はり、優に我が大軍を抑止するに足ると信じたるが如し。然れども我が北進軍は連戰連捷の勢を以て、この大敵に當り、驀然猛進、一大決戰の後、遂に此の地を占領したるは實に世界の刮目して見たる處なり。今その公報を錄すれば

〇遼陽占領　我諸軍は八月下旬鞍山店湯河沿附近の攻擊運動を開始せり其經過左の如し

右翼軍は八月二十四日より運動を開始し二十五日夜より二十七日に亘り劇戰の後敵を擊退して紅沙嶺、孫家塞、高峰寺に亘る線を占領して尙ほ追擊を續行し廿九日英守堡、石咀子、响山子の線に達し三十日夜より三十一日に亘り軍は其主力を鐵刀溝

に於て太子河右岸に移し其一部を太子河左岸に殘置し中央軍と連繫して動作せしめたり軍の主力は九月一日より黑英臺西方附近にある敵に向ひ攻擊を開始せしが敵の抵抗頑强にして且つ前日より兵力を增加せしを以て攻擊容易に進捗せず然れども四日間に亘る劇戰の後九月四日正午過遂に敵の陣地を略取せり九月四日太子河左岸に在りし同軍の一部を更に太子河右岸官屯に移したり

中央及左翼軍は二十六日より運動を開始し敵を壓迫して二十七日下石橋子、候家屯、蘇馬臺の線に達す然るに此日下房身、鞍山店の防禦陣地に據れる强大なる敵は遼陽方向に退却を始めたり依て中央左翼軍は直に追擊に轉じ敵の一部隊を驅逐しつゝ二十九日中央軍は潘家嶺、沙河の線、左翼軍は沙河漁家臺の線に達す敵はヤユチ北方高地より早飯屯南方高地、新立屯東西の兩高地を經て首山堡西方高地に亘り堅固に陣地を構成しあり故に中央軍は更に之が攻擊に着手せり此の情況に於て左翼軍は首山堡附近の敵を攻擊し以て中央軍の戰況に應じ協力敵を攻擊せり

三十日中央軍の右翼は右翼軍の左翼たる一部と共にヤユチ北方高地より早飯屯高地

に亘り占領せる敵に對して攻擊を開始せしも敵は遼陽方向より强大なる增援を得中央軍の右翼は其略取したる位置を一時支持するの已むを得ざるに陷れり

此戰況に於て本官は左翼軍に命じ一意迅速に首山堡附近の敵を擊破するの任務を與へたり同日中央軍の左翼及左翼軍も亦新立屯及首山堡附近の敵に對して攻擊を開始して敵は頑强に抵抗し屢々逆襲を試み攻擊甚だ困難なりし

然れども兩方面の敵は我軍の連日連夜の猛烈なる攻擊に堪へず卅一日夜半に至り遂に我軍の擊退する所となり遼陽方面に退却し兩軍は直に追擊に移りたりしも敵は再び遼陽の南端及び西端を圍繞せる堅固の堡壘線及木廠東北方高地に據り頑强に抵抗し我兩軍は九月一日より三日の夜に至るまで遼陽に對する攻擊を繼續し以て遂に敵壘線を奪取し四日朝全く遼陽を占領せり

敵は三十日に至る迄汽車にて增加兵を遼陽に輸送したるの兆候あり而して我に對せし敵の兵力は未だ詳ならずと雖も總數少くも約十二師團なるべし今や敵の大部は未だ煙臺以北に退却せざるものゝ如く其の一部は迎水寺附近に停止しあり停車場附近

の倉庫及び鐵道橋幷に太子河の架橋は敵之れを燒夷せり

我左翼軍、中央軍は太子河左岸に停止し一部隊を以て木廠北方高地及鐵道橋附近を占領する筈なり二十五日以來我軍の損害に就ては未だ正確なる報告に接せずと雖も多大の數に達すべし敵の損害に就ては未だ詳ならず

敵が全力を擧て牢永久的に構築せし數段の防禦線に對し十日間に亘る攻擊を以て遂に目的を達し多大の犧牲あるにも拘らず士氣頗る旺盛なり

去る五日敵は約一萬の負傷者を奉天以北に運搬したる情報あるも未だ全損害の實數を推測するに至らず敵は戰鬪間巧に屍體を運搬し去りたる形跡あり然れども尙遼陽附近に委棄しある屍體數三千以上なり

敵は遼陽を退却するに際し停車場の諸倉庫を大抵燒棄したれども尙糧食品其他莫大の戰利品あり敵は辛じて火砲を持去りたるも彈藥車は之を彈藥庫の傍に集積爆發せしめたり然れども堡壘砲臺に棄却せし彈藥は頗る多大にして未だ其數を積算するに遑あらず遼陽附近に於て鹵獲せし彈藥の內十五珊米及十八珊米加農の彈丸あり之よ

り察すれば敵は重砲を有したるも全く使用するに至らざりしものならん

○敵軍の戰鬪力

遼陽陷落の際捕虜其他の言に依れば戰爭當時の敵情左の如し

遼陽附近に集中ありし敵の兵力は第二、第四、第五、第七、第十七軍團及其他の軍團の若干部隊なり其配置は遼陽西北面に一軍團南方面に一軍團其後方に一軍團我右翼軍に對して一軍團遼陽西北方太子河右岸に一軍團なりしが如し

首山堡方面の指揮官はスタケルベルクなりしミシチエンコは最初遼陽西南方面に在りしが我右翼軍が太子河右岸に移りたるに依り更に遼陽の東方に移り次で太子河右岸に在りし軍團も亦此方面に增加せられたり

露軍の損害は鞍山店撤去以來遼陽陷落迄總計二萬五千人以上に達したること確實なり

浦鹽露艦擊沈

（上村第二艦隊司令長官報告八月十五日午後五時三十五分着）

十四日天明出雲、吾妻、常磐、磐手は韓國蔚山沖に於て索敵行動中浦潮艦隊三隻の南航するを發見せり敵は我隊を見るや北に向ひ遁走せんとするを以て直に其前途を扼し午前五時二十三分に至り戰鬪を開始せり

敵の殿艦リユーリツクは常に後れ勝ちにて斷へず激烈なる砲火を被れり前續二隻は屢々勇敢に之を捲護し遠ざかれば轉回して之に近づき近けば又前進せり依て我隊はT字形を畫きて敵に集彈するの利を得たり其結果敵艦をして何れも數次大火災を起し多大の損害を負はしめたり特にリユーリツクの如きは遂に進退の自由を失ひ砲力も亦全滅に近づき時々緩慢なる發射を爲すのみにして其艦尾は著しく沈み且少しく左舷に傾斜するを見たりしが敵は遂に之を捨てゝ遁走せり恰も好し第四艦隊戰場に近づき浪速、高千穗のリユーリツク攻擊に進むを見たるを以て本隊はロシヤ、グロンボイを追擊せり此間激戰約五時間に及び敵の二艦は全速力を以て遁走す午前十時

十九分我戰隊は右舷に回頭し「リユーリツク」捜索の爲めに南航せるに「リユーリツク」は遂に沈沒せるの報に接せるを以て直に全隊の集合を命じ其沈沒位置に至り浮泳する人員約六百名を救助し得たり

沙河の大會戰

明治三十七年十月、敵帥旅順の急を救援せんが爲に南下攻勢に轉ずるの兆あり。我軍疾く之を知り、十日沙河に邀擊して連戰五日に亘る。我諸軍は有力なる敵を破り、次で勇猛果敢なる追擊を加へ、之を渾河の左岸に壓迫し、多大の損害を與へ、全然彼の企圖を挫折し、其攻勢的運動をして根底より失敗に終らしむ。敵が各所に遺棄せし死體は壹萬に近く、其損害三萬を下らざるべく。尙野戰砲三十餘門を奪取し、捕虜五六百我死傷七八千とす。左に各軍の行動及び捕虜將校の陳言を掲げん

○右翼黑木軍 の中央縱隊は十月十二日午前五時ロウコウシン(?)山及八家子北方高地を占領し、同軍の左縱隊は燒達勾北方高地を占領し、續て敵を追擊し、中央縱隊は馬耳山を占領し得たり

十三日右翼軍の首力は中央軍と共に追擊し、尙本溪湖附近に在る敵の退路を遮斷する爲め、石橋子に向て一部隊を出せり。軍の方面は地形に制せられ、概して攻擊進捗意の如くならざりしが、十四十五兩日に於て我軍大に優勢に轉じ、連戰連勝、疾風迅雷の勢を以て敵を追擊せり。敵の遺棄せし死體は四千五百餘、其損害は二萬を下らざるべく、捕虜六百戰利品彈藥車六砲彈二千

○中央野津軍 は十日夜半より運動を起して、今早朝三家子より三塊石山の西北方にある高地の線に達し、目下敵を追擊中なり

十三日朝軍は三塊石山に於て野砲及彈藥車十一を奪取せり。捕虜の言に依れば、クロパトキンは約三師團の兵力を擁して右翼軍主力に對せし敵の後方に在りしと云へり。此日捕虜百五十名敵屍五百を算すべし

十四日軍は長嶺子同家放附近の敵陣地を攻擊して、沙河以北に擊退し、沙河の線に

遂せり本日に於ける敵の遺棄せし死體約千、捕虜百、其他戰利品數多し。十日以來のものを綜合すれば本軍前面に遺棄せる死體は二千五百を下らず、

○左翼奥軍　十日攻擊前進に着手す。十三日軍の中央縱隊は有力なる敵の抵抗を擊攘して浪子街を占領し、砲廿門奪取、敵潰亂北方に退却せり。依て追擊前進に移る。軍の右縱隊は十里河西方に於て追擊中、敵砲五門彈藥車五輛奪取、合計砲二十五門、彈藥車五輛鹵獲。十四日朝中央縱隊は于家窪子に敵の砲兵を攻擊して砲十門を奪取せり。敵潰亂東北方に退却す。十日以來十四日に至る數日間の連續戰益有利にして、各方面共悉く優勢なる敵を擊破し、續いて勇猛なる追擊を加へ、敵を渾河の左岸に壓迫す。捕虜數百、敵屍約四千、敵の損害は三萬に達すべし。我軍の損害三千五百内外とす

○逆襲六回　十五日軍の左縱隊の前面には六回の逆襲を行ひ來りしも悉く之を擊退して多大の損害を與へたり

○再後の逆襲　然るに夕刻に至り更に歩兵五六大隊砲兵二三中隊を有する敵は同縱隊に向て攻擊し來り同縱隊は亦之を擊退せり

山田少將の率ゆる混成一部隊は昨十六日夕左翼軍の一部沙河堡北方の敵に對する攻擊を援助せんが爲め其右翼に連繫して攻擊を開始し先づ魏家樓子附近の敵を擊退し敵砲二門彈藥車二輛を鹵獲し其後支隊は三道岡子に亘りて展開し敵を擊退して其任務を了り日沒後夜暗を利用して從前の陣地に退却中

午後七時頃に至り約一師團の敵は猛烈に前進し來り支隊は兩翼を包圍せられ頗る苦境に陷り彼我の間に劇烈なる搏鬪起り其正面に之を擊退し得たるも左右兩側は遂に之を拒支する能はざりしを以て各隊は各一方を突破して從前の陣地に到着せり此際砲兵は其兵員馬匹の多分を敵彈の爲に斃され野砲九門山砲五門は遂ひに遺棄するの止むを得ざるに至れり此戰に於ける我損害約千名に達す

○敵將の陳言　旅順要塞は日々益悲慘に陷れり然るに滿洲方面に於ては歐洲より增援兵續々南滿洲に來着し目下クロパトキン奉天附近に掌握し得し兵力は九軍團以上に至れり此を以て露帝は去る九月廿七日を以てクロパトキンに今後一歩たり

とも率天以北に退却すべからず事情の許す限り迅速に攻撃勢に轉じ日本軍を南滿洲に驅逐し以て旅順の急を救ふべきを命じたり故にクロパトキンは其全力を提げて率天以南に進出し攻撃に轉ずる爲め全軍を中央及左右の三縱隊に區分せり中央縱隊は第一、第四第五軍團より成りサルバエフ之が總指揮を爲し東山口蓮花山方面に現れしもの即此縱隊なり左縱隊は約二軍團より成り日軍の右翼に向ひスタルケルベルグ指揮官たる成り右縱隊は三軍團なり日本軍の左翼に向ふ別に一軍團は中央縱隊の後方に續行す其他リヰウイッチは烏蘇利地方の野戰軍を率ひ東方より大迂回をなし遼陽の東南方に迫り以て同軍の退路を脅威する筈なる如し又ミシチエンコは龍騎兵六聯隊を指揮しリヰウイッチ支隊の右に連り運動せり

中央縱隊は右に第一軍團左に第四軍團中央後に第五軍團位置す第四軍團は目下西伯利豫備第一乃至第四師團より成り各師團は各速射砲四中隊を有す第一軍團第三十七師團の右翼には第九師團の兵おるを見たり

思ふに此度の戰爭は尙永續すべし露國は其一大目的たる最終の戰勝を償ふ爲めには假令幾多の高價を拂ふも尙辭せざるべし大敗の結果は露國の一大革命邦土の分裂を來たすの時たるを覺悟せざる可らざればなり

此度の戰鬪に於て第三十七師團殊に其の第一旅團の損害の如きは非常なるものにして第百四十五聯隊第一中隊の如きは三塊石山上に於て全く殲滅し又大隊長以下將校の死傷し或は捕虜となりしもの多かりし西伯利豫備歩兵第三師團の損害も亦頗る大なりしが如し此師團の各聯隊は出戰當初は約四千なりしが遼陽戰後二千五六百に減じ此度の戰鬪に於て第十二聯隊の如きは僅に八百の現員となれり其結果として大尉は聯隊を少尉は大隊を上等兵は中隊を指揮するの已むを得ざるに至れり

乃木第三軍の活動

陸軍大將乃木希典氏の率ゐる第三軍は、最初は當時戰地に在りし第一第十一の兩師團を以て編成せられしが、後第九師團を增加せられたり。軍は六月七日宇品出帆、

十日北泡涯子に至り、七月廿六日前進を始め二十八日を以て安子嶺凹字山形山等敵の防禦線を奪取し、同月三十日更に敵を攻撃して火石嶺子鳳凰山等の線を占領し、敵を要塞本防禦線内に撃退して、全く旅順背面包圍の狀況を成すに至れり。次で八月十九日第一回の總攻撃を行ひ、盤龍山東西砲臺を奪取したるも、敵は天然人工を疊ね備へたる地の利に據りて能く防戰し、我軍をして容易に前進するを得ざらしめたり。軍は猶ほ百折不撓九月十九日に至りて水源地の堡壘、海鼠山等を占領し、次で十月廿六日の第二回の總攻撃を行ひ大に廿八珊知榴彈砲を發射して一戸砲臺を奪取せり。其後第七師團の增加ありしが、十二月五日に至り非常の困難を冒して竟に彼の有名なる二〇三高地を占領せり。鎖鑰一たび我手に歸するや向ふ所必ず勝ち、東鷄冠山北砲臺、二龍山、松樹山等相次で爆破せられ、望臺も亦占領せらるゝに至れり是に於て敵將ステッセル復防戰する能はざるを悟り、三十八年一月一日を以て旅順開城の軍使を送り來れり。乃木將軍乃ち之を許し、一月十四日を以て入城式を行へり。旅順既に陷落したれば乃木將軍は第一第七第九の三師團を率ゐ（第十一師團は第三軍の戰鬪序列より離去することとなりて）漸次北進し、奉天戰の準備の爲め全軍の最左翼に位し、次で小北河、四方臺、馬三家子等の各地を經て奉天の西北方に迂回運動をなし、竟に其包圍を完成して敵の退路を遮斷するに至りし功績は、旅順攻城の偉大なるに讓るとなし。尚第三軍の爲に特筆すべきは攻城野戰の困難を犯し、兩つながら其大成功を得たるに在り

初の參謀長は少將佛地知幸介氏なりしが、旅順陷落後轉じて同地要塞司令官となりしに依り、松永正敏氏歩兵第三旅團長より代りて其後を襲ぎ、幾もなくして同少將は病氣後送、一戸少將更に代つて參謀長となれり

旅順攻圍戰

八月十六日朝八時軍參謀山岡少佐を軍使として敵の前哨に差遣し　陛下の聖旨並に勸降書を敵の要塞參謀長に手渡せしめたり十七日朝十時敵より回答ある筈なり

我軍使より敵の要塞參謀長に書面を交付せしは十六日午前十時三十分水師營北方五百米突の地點にして我より指定せし條件左の如し

一、我大元帥陛下の至仁なる聖旨に基き避難し得べきものは婦人小兒(十六歳以下)僧侶、中立國の外交官及觀戰將校

二、此に對する回答は八月十七日午前十時水師營北方五百米突の地點に齎すべきこと

三、避難者は白旗を揭げて前進し同十七日午後二時前と同一地點に來るべきこと

四、我歩兵の一隊は白旗を揭げて同一地點に至り避難者の來たるを待ち之を受取ること

五、避難者は各自己の荷物を携帶するを許す但し要すれば其内容を檢査することあるべし

六、地圖書、印刷物、書簡其他文字記號を以て記する書類及戰爭に關する物件を携ふるを許さず

七、避難者は十分保護を與へ青泥窪に護送せしむ

八、回答には諾否の一を撰ぶべく條件の改訂を許さず

八月十九日第一回の總攻擊を行ひ、尋で盤龍山東西砲臺を奪取したるも、敵は天然八工を兼備せる地の利に據りて能く防戰し、我軍をして容易に前進するを得ざらしめたり、然れども軍は百折不撓、九月十九日水源地の堡壘及海鼠山等を占領し、十月廿六日第二回の總攻擊を行ひ盛んに廿八珊知砲を發射して一戸砲臺を奪取せり。軍は爾後第三回第四回の總攻擊を實行せるも、毎次損害多く得るところ少かりき軍は松樹山及其以東の諸砲臺に對する攻城作業略ぼ完成したるを以て十一月二十六日午後より强襲を試みたるも敵の抵抗頑强にして容易に其目的を達するに至らず十一月廿九日松樹山及其以東に在る敵の堡壘線に對し其外岸斜堤頂及其附近を堅固に占領したるも未だ突入の機に達せず二〇三高地に對する攻擊は數回の突擊により其頂附近に在る敵の塹濠を奪取して之を保持し尚ほ進んで同堡壘の奪取を勉めたり

二〇三高地と両師團の大悪戰

我攻圍軍は敵次の總攻撃を爲して多大の損害を受け、今や戰術上施すに道なしと稱す。時に歐米の兵家旅順を評して曰く、二十萬の大兵を以てして尚三ヶ年の日月を費すと。我軍如何に勇猛死を視る歸るが如しと雖ども毎次の攻撃徒に死傷を增すのみ。茲に於て乃木將軍大に決するところありけん。第一師團をして二〇三高地を力攻せしめたり。然るに敵の抵抗頑强を極め、奏功に至らずして師團は遂に全滅に歸したり。嗚呼悲慘と謂んか壯烈と稱せんか。然れど剛毅不拔の將軍は之に屈せず、再び第七師團をして代つて攻撃せしめたり。師團も亦全滅を期し、十一月三十日拂曉より二〇三高地に向ひ砲撃を開始し、午後四時に至るまで數回の突撃を決行せしも、死力を盡せる敵の防戰とて、其彈丸は雨霰も曾ならず、忽ちにして死屍山を爲し、流血河を爲す。されど不屈不撓なる北海師團敵壘を奪取せずして、如何でか止むべき。午後五時大突撃を强行して、遂頂下約三十米突に肉薄し、午後七時友安旅團の增援を得て壘上に突入し、遂に之を占領せり。其東北部に向ひたる部隊も亦尋で突撃を行ひ、午後八時多大の犧牲を出して全く二〇三高地を我有と爲せり。此高地の東側には敵屍累々として其數計ふべからず。嗚呼悲、嗚呼慘、乃木將軍此高地を命名して爾靈山と呼ぶ

敵將官の負傷十八日東鶏冠山北砲臺に於て獲たる捕虜の言並に、二十二日椅子山方面より投降したる露兵の言に依れば、二〇三高地戰鬪に於て東部西伯利狙擊歩兵第七師團長中將コンドラチエンコ、砲兵第四旅團長少將イルマンは戰死し、東部西伯利歩兵第四師團長中將フォークは負傷したりと云ふ

敵艦十六雙の最後

（第七師團と海軍重砲隊の功績）

我海軍は奥第二軍の上陸以來、常に陸軍を援助しつゝありしが、旅順攻圍軍則ち乃木第三軍の編制と共に一變して、海軍陸戰重砲隊を組織し、黑井海軍大佐之を率ゐ、

七月十日海軍重砲六門を西部猪圈子溝西方千五百米突の地點に配置したる以來、敵壘、市街、軍艦に猛烈なる威力を加へ、毎戰偉功を奏せり。十一月三十日武勇絶倫なる我第七師團及友安旅團が猛擊突進血戰中の大血戰を以て二〇三高地を占領するや我軍は茲に始めて東西兩港内を自由に展望するを得て、適當なる觀測の下に十二月二日より連續十二日に亘り、多年動搖せる海上に訓練したる手腕を以て、陸軍攻城砲隊と共に猛烈なる大砲擊を與へ、其敗殘艦隊十六隻に止めを刺したり。旅順開城後ステッセル將軍乃木將軍に謂つて曰く、我軍に於て最も困難を極めたるは貴軍の重砲なり。大連市長スハロフ若し我言を容れて、彼の築港を爲さざれば日軍如何に勇なりとも斯の如き慘害を受けざらんをと

旅順各砲臺占領

二〇三高地一度陷りしより以來、敵壘續々破れ武勇なるステッセル將軍も茲に降伏の密議を開くに至れり

○赤阪山占領　赤阪山の敵兵は二〇三高地に占據せる我兵の瞰射に堪へず十二月六日其陣地を撤退し我兵は午後一時其の全部を占領せり次いで午後二時寺兒溝北方高地午後三時三里橋北方高地の敵を擊退して我之を占領せり

○東鷄冠山北砲臺占領　軍の一部は十八日午後二時十五分東鷄冠山北砲臺の胸墻に大爆破を行ひ同時に突擊に移り彼我烈しき爆藥戰を交ゆ敵の防戰最も努め且つ其機關砲射擊の爲め我攻擊の進捗一時意の如くならざりき

次で午後七時頃鮫島中將は自ら其豫備隊を率ひて外岸穹窖内に前進し部下の勇氣を作興し其豫備隊を戰線に加へて最後の大突擊を行ひ遂に午後十一時五十分全く同砲臺を占領せり敵は退却に當り其咽喉部附近に埋設せる四個の地雷を自ら爆發せり同砲臺に九珊知野砲五門機關砲二門及多數の彈藥幷に四五十の屍體遺棄しあり

○鳩灣占領　軍の右翼部隊第七師團の一部は二十二日頃午前五時敵兵動搖の期に乘じ後三羊頭村(鳩灣沿岸)北方高地の敵を襲擊して之を占領し次で同七時同村西

方宇島高地の敵を驅逐して又之を占領し同地にありし敵の小口徑砲一門を鹵獲せり

○二龍山占領　軍の左翼隊は廿八日午前十時二龍山砲臺胸墻の大爆破と共に突擊を實施して該胸墻を占領し重砲及び野戰砲の掩護により敵の銃砲火を犯して銳意占領工事を施し其の占領略確實なるに及び午後四時更らに內部重砲線に突擊して直に同線を占領し尙ほ進んで咽喉部に向ひ同所を頑守せし殘敵を擊退し午後七時三十分遂に全砲臺を占領せり

○松樹山占領　軍は十二月卅一日午前十時豫定の如く松樹山砲臺胸墻爆破の後右中央隊の左翼隊を以つて突擊を實施し午前十一時頃該地砲臺全部を確實に占領せり敵は我行ひたる胸墻爆破に續きて砲臺內部に布設したる地雷を爆發し其一部は該砲臺の南方高地に退却せしが一部は咽喉部に在る掩蔽部內に於て爆破の爲に墜落したる土砂により塡塞せられたり松樹山掩蔽部に塡塞せられたる敵兵は其後入口を堀開して逐次之を引出し悉く之を捕虜とせり其の數將校二、下士以下百六十餘名なり又捕虜の言に依れば我爆發の爲に埋沒せられたる敵の死者は約百五十名なりと

○元日の旅順攻擊　中央隊の一部は敵を驅逐し一月一日七時砲臺を占領し次で盤龍山新砲臺を奪取せり茲に於て二龍山より盤龍山砲臺を經て日砲臺に亘る線は確實に我が有に歸せり

又右翼隊の一部は午前八時頃より砲擊を開始し午後二時に至り頑强なる敵の抵抗を排除し後三羊頭村南方高地を確實に占領せり

○望臺占領　中央及左翼隊は同日九時頃より望臺に向ひ攻擊を實施し我砲擊の成果を巧みに利用して突進し午後三時卅五分全たく望臺を占領せり

本日日砲臺に於いて火砲三門望臺に於いて火砲四門を鹵獲せり詳細目下取調中又過日松樹山に於ける我戰利品は七珊知野砲三門五十七密砲二門機關砲二門なり

旅順陷落

(明治三十八年一月一日夜大本營發電 旅順攻圍軍報告)

本日午後九時關東州警察地區司令官スタッセル將軍より開城に關する書面を受領せり

彼我の軍使

(一月二日午前三時大本營着電)
(旅順攻圍軍司令官報告)

昨一日午後五時頃敵の軍使水師營南方の我第一線に來り我將校に次の書簡を交附し同九時小官之を受領せり

敵將の降伏狀

第二五四五號(旅順口一九〇四年十二月)

貴下交戰地域全般の形勢を考察するに今後に於ける旅順口の抵抗は不要なり依て無益に人命を損せざる爲め予は開城に付談判せんとを望む若し閣下之に同意せらるゝに於ては開城の條件順序を討議する爲め委員を指命し幷に予の委員が該委員と會合すべき場所を撰定せられんとを願ふ

予は此機會を利用し予の敬意を表す

旅順攻圍軍司令官男爵乃木閣下　　ステッセル將軍

依て小官は次の回答を我軍使に齎し今天明直に彼に交附せしむる筈なり

乃木將軍の回答

貴下予は茲に開城の條件及順序に付談判せんとする閣下の提議に同意する光榮を有す之が爲め余は旅順攻圍軍參謀長少將伊地知幸介を委員に指命し尚之れに若干名の參謀及文官を隨行せしむ即ち一九〇五年一月二日の正午に水師營に於て貴軍委員に會合すべし双方の委員は調印の後批准を待たずして直に効力を生ずる開城規約に署名するの全權を有すべく其の全權委任狀は双方の最上指揮官の署名したるものにて互に交換すべし

余は此機會を利用し敬意を呈す

旅順口攻圍軍司令官男爵　乃木將軍

關東要塞地區司令官ステッセル將軍閣下

參謀總長は聖旨を奉じて左の電報を旅順攻圍軍司令官乃木大將に送れり

聖一旨

旅順攻圍軍司令官発　一月二日午前八時發電　總長

將官ステッセルより開城の提議を爲し來りたる件伏奏したる處

陛下には將官ステッセルが祖國の爲め盡せし苦節を嘉みし玉ひ武士の名譽を保たしむべきことを望ませらる

右謹で傳達す

攻撃中止

東鶏冠山及Q堡壘の敵は一月二日零時三十分頃二三回の爆發を行ふと同時に一時燃に小銃を亂射し次で頓かに之を止めしを以て直ちに斥候を派遣せしに敵は既に其地を撤退せり依て我兵直ちに前進して兩堡壘幷に其南方に在るN及M高地を占領せり

今朝敵の大小艦船は殆んど悉皆港口に又は港内に於て自ら爆沈し終へり

今朝より彼我全權委員の會合を終る迄は全線に於て我よりの攻撃動作を中止せしめたり

旅順開城規約

二日午後九時四十五分を以て兩全權委員に於て本調印を終りし開城規約左の如し

第一條　旅順要塞及該港にある既國の陸海軍々人及義勇兵並官吏は總て之れを捕虜とす

第二條　旅順口に於ける全堡壘、砲臺、艦艇船、兵器彈藥、馬匹其他一切の軍用諸材料、官舍、官有諸物件は現狀の儘之を日本軍に引渡すものとす

第三條　前二箇條を承諾するに於ては其の擔保として來る一月三日正午迄に椅子山小案子山、大案子山、及び其東南一帶の高地上にある堡壘、砲臺の守備を撤し日本軍に交附すべし

第四條　既國陸海軍に於て本規約調印の當時に現在する第二條の諸物件を破壞し又

は其他の方法に於て現狀を變更すと認むるときは談判を廢止し日本軍は自由の行動を取るべし

第五條　在旅順口露國陸軍官憲は旅順要塞、配備圖地雷水雷、其他危險物の布設圖及在旅順口陸海軍編成表、陸海軍將校官職等級氏名簿、文官々職氏名簿、軍隊艦艇名簿及其乘組人員名簿、普通人民の男女人稠職業員數表を調製し日本軍に交附すべし

第六條　兵器(各人の携帶兵器を含む)彈藥、軍用諸材料、官舍、官有諸物件、馬匹、艦船艇及其内部の諸物件(私有物を除く)は悉く之を現在の位置に整置すべし其受授の方法に關しては日露兩軍の委員に於て規定するものとす

第七條　日本軍は義軍の勇敢なる防禦を名譽とするに依り露國陸海軍の將校及所屬官吏に携劍及び直接生活に必要なる私有品の携帶を許す又た前記將校、官吏及び義勇兵にして本戰役の終局に至るまで武器を取らず如何なる方法に於ても日本軍の利益に反對する行爲を爲さゝることを筆記宣誓するものは本國に歸還することを

承諾す陸海軍將校には各人に一名宛の從卒を隨行せしむることを許す此從卒は特に宣誓解放をなす

第八條　武裝を解除したる陸海軍下士兵卒及義勇兵は其制服を着用し携帶天幕及び所要の私有物件を携へ所屬將校の指揮を以て日本軍の指示する集合地に至るべし但し其詳細に關しては日本軍の委員に於て之を指示す

第九條　旅順口にある露國陸海軍の衛生部員及經理部員は病傷者及俘虜の救護給養の爲め日本軍に於て必要と認むる時期迄日本軍の衛生部員及經理部員指揮の下に殘留して引續き勤務に服せしむべし

第十條　普通人民の處置、市の行政會計事務及之に關する書類の引繼ぎ其他本規約執行に關する細則は本規約附錄に於て規定す

右附錄は本規約と同一の効力を有す

第十一條　本規約は日露兩軍に於て各一通を製し調印の時より直ちに効力を生ず

砲臺及軍器受渡

三日双方委員の打合せを終り四日朝より堡壘砲臺を始め一切の軍用諸材料並に官有諸物件の受授に着手する筈なり

擔保として受領すべき椅子山、大小孟子山及其東南一帶高地の堡壘砲臺は三日午後一時半故障なく受取れり

攻守両將軍の會見

勇敢なる旅順守將ステッセル將軍、開城に際し我軍使某參謀を介して謂て曰く、吾人は祖國の爲に盡すべき義務は既に盡し終れり、而して予は個人として武勇絶倫なる乃木大將に一度會見を遂げ、今日の紀念と爲さんとす、君之を將軍に傳へられよと。乃木將軍之を聞き直に快諾。即ち明治三十八年一月五日水師營に而會せんとす

約す。當日ステッセル將軍はレース參謀長以下を率ゐて來會、乃木大將亦伊地知參謀長以下を從へて到り、懇談數刻携帶し行ける酒を酌み交はし互に胸襟を披瀝して其厚情恰も百年の交りの如し、又一言半句も談戰事に及ばず。會話中ステッセル乃木將軍二令息の戰死を聞き、落涙して日軍の勇猛を歎賞し、將軍の沈着なるを激賞せり。ス將軍別離に當り己が乘馬二頭を乃木大將に贈り、後人に語つて曰く、將軍は剽悍にして慘酷なる人と思惟せしに、今や親しく面して眞に仁慈温厚恰も慈母に接するが如く、温容美しき良將軍なりと、口を極めて賞賛止まざりしと云ふ。平素は處女の如く戰に當りては鬼神の如しとは實に乃木將軍の謂か

敵將の電奏及電勅

ステッセル將軍の電奏

墨波得堡に發電

露國皇帝陛下宛

スツセル將軍

明治三十八年一月二日午後九時周家屯軍用通信所發

本日微臣旅順降伏に關し開城規約に署名するの已むを得ざるに至れり將校及び文官は佩劍を許され現在の戰爭に與からざるの義務を負ひ露國に歸國することを許さる然らざれば捕虜として在留せざるを得ず微臣は皇帝陛下に此要請せられたる義務に對する御裁可を仰ぐ

露國皇帝の勅答

旅順周家屯にて

侍從武官　將官ステッセル宛

千九百五年一月三日午後五時三十分南露ミチャウノイツチ發

四日午前四時周家屯通信所着

朕は各將校に保留せる特權を利用し現在の戰役に參與せざる義務を負ひ露國に歸來するか若くは兵卒と運命を共にせんことを許可す卿及び勇敢なる守兵に光輝ある防戰を感謝す

ニコラス

旅順の捕虜數

（一月五日午前七時五分大本營着電旅順攻圍軍報告）

前報の如く昨四日を以つて規約第二條に掲る諸物件の授受を行ひ堡壘砲臺の如きは凡て之を受領し其の他の物件も亦大略其の手續を終り又總ての捕虜は今五日指定の場所に集合せしむる筈なるも之れに關する總ての調査は甚だ繁雜にして未だ容易に其結果を報じ得るに至らずと雖も今迄に得たる諸報告の大要を摘載すれば左の如し

將官	陸軍　八人	海軍	四人
佐官	同　五十七人	同	百人
尉官	同　五百卅一人	同	二百人
陸軍文官	九十九人		

軍醫　百〇九人　海軍　七人
從軍僧侶　陸軍　十三人
下士卒　陸軍　二萬二千四百三十四人　海軍　四千五百人
非戰鬪員　陸軍　三千六百四十五人　海軍　五百人
總計　三萬二千二百七人
義勇兵は重に非戰鬪員中に含む尙此他に在院の病傷者約一萬五六千あり
駄馬　約千八百七十頭　乘馬　約百頭

旅順鹵獲品

（明治三十八年一月十二日午前三時大本營發電乃木軍報告）

昨十日迄に堡壘、砲臺、艦船、兵器其他諸物件の受領を終れり其の主要諸物件の品目數量大約左の如し

一、永久堡壘、砲臺　五十個　二、兵器彈藥車輛等

大口徑火砲　五十四門　輜重車　六百〇六
中口徑火砲　百四十九門　雜種車　六十五
小口徑火砲　三百四十三門　乘馬具　八十七
火砲彈藥　五百四十六門　駄馬具　二千〇九十六
砲彈　八萬二千六百七十發　三、電燈　十四
水雷　六十個　四、電信機　十五
彈藥　千五百八十八個　電話機　百三十四
火藥　三萬吉羅　回光通信機　三
小銃　三萬五千二百五十二挺　五、土工器具　千百七十一
拳銃　五百七十九挺　六、馬匹　千九百二十頭
軍刀　千八百九十一振　七、艦船艇
小銃實包　二百二十六萬六千八百發　戰艦「ペレスウイット」以下四隻
彈藥車　二百九十（「ペストポール」は全く水底に在

るを以て之を除く)

巡洋艦「バルラダ」以下二隻		小蒸汽船	八隻
砲艦、驅逐艦	十四隻	雜船	十二隻
汽船	十隻	其他民有船	若干

以上は皆破壞若くは沈沒せるもの

右の外多少の修理を加へ使用し得し小汽船三十五隻あり

沙河敵軍大襲來

三十八年一月廿五日以來渾河右岸の敵は活動を始め一軍團を下らざる敵は長灘南方の地區より黑溝臺及沈旦堡に向ひ前進し來れり依て我軍は廿六日直ちに之に對し攻勢に轉じ我が一部隊は沈旦堡附近に在りし約一師團の敵を柳條口附近に擊退せり又我が他の一部隊は黑溝臺附近に在りし一師團以上の敵と交戰せり

一月廿八日柳條口附近を占領せし我部隊は昨夜二回有力なる敵の逆襲を受けしが悉く之れを擊退せり又他の一部隊は今拂曉菲菜河子(黑溝臺の北方約一里)附近の敵を攻擊し同地を占領せり

沈旦堡及び李大人屯方面も二十八日の夜屢々敵の來襲を受けしが又悉く之を擊退せり李大人屯及び沈旦堡方面に攻擊し來りし敵は第八及第十軍團にして黑溝臺方面に來たりし敵は第一軍團及狙擊步兵より成る集成軍團並にミシチエンコの指揮する騎兵師團なり敵の捕虜將校以下約五百名

黑溝臺と第八師團の苦戰

黑溝臺攻擊軍臨時立見軍は一月廿五日正午頃黑溝臺方面に來襲せし敵を擊攘すべき任務を領し大臺附近に集結せり此の日黑溝臺を守備せし我が一支隊は約一師團の敵に包圍せられ頑强なる抵抗の後夜暗に乘じ古城子方面に退却せり

廿六日黑溝臺攻擊軍司令官は左翼隊をして蘇麻堡頭泡の線に右翼隊をして其右翼に

進擊し砲兵全部をして老橋西端に展開して黑溝臺を攻擊せしむ

此日飛雪紛々として寒威凜烈大に視界を妨げ運動爲めに遲延し正午頃より黑溝臺の攻擊實施中一師團の敵は長灘方向より前進し沈旦堡を攻擊して之を包圍し其一、二大隊を以て我に向ふの報に接し古城子附近に在りし部隊をして此敵を擊攘せしむ

左翼隊は蘇麻堡、五家子の線に展開せしが敵は黑溝臺頭泡の線を占領し特に頭泡は其形狀恰かも城塞の如く之に機關砲を備へ防備頗る堅固なるを以て先づ之を奪取するに非ざれば黑溝臺の攻擊意の如くならざるを以て首力を擧げて之を攻擊し右翼隊は老橋東側に於て約二大隊を驅逐しつゝ老橋、蘇麻堡の線に展開し全く蔽開地に暴露して勇敢に攻擊前進を行ひしも敵の砲兵は黑溝臺の周圍に放列を布置し總數約三十門巧に縱斜射を行ひしを以て我死傷多大にして未だ目的を遂するに至らずして日沒に至る

二十七日我右翼に迫りし敵は一時退却せるを以て古城子附近に在りし部隊を中央とし兩翼隊の中央に排列し蘇麻堡を左翼とするが如く展開し黑溝臺に向て攻擊せり

又狼洞溝附近に在りし一兵團をして柳條家及び李家窩棚の線を占領して黑溝臺攻擊軍の右翼隊の右側背及沈旦堡左側を掩護せしめ又某一部隊を修二堡方向に前進せしめ該方面に現はれたる敵を擊攘して遠く軍の左翼背を掩護せしむ

狼洞溝附近に在りし兵團は午前十時四十五分同地を出發し大臺東側を經て猛烈なる敵の銃砲火を冒し勇猛果敢に柳條口及李家窩棚の線にある約一師團の敵に對し攻擊前進し爲めに黑溝臺攻擊軍の右側背をして安全ならしめたり

黑溝臺攻擊軍は猛烈に敵を攻擊せしも敵兵就中其砲數は逐次增加し我が死傷多大にして攻擊の進捗意の如くならず然れども諸隊は毫も之を顧みず步一步に敵に近接せり

左翼隊は牛居及黃蠟蛇子方向より來る約一師團の敵に側面を衝かれ又八黃地附近に侵入したる敵の步兵及び騎砲兵に背射せられ將校以下の死傷甚だしきを以て其の左翼を一時三尖泊に後退するの止ひを得ざるに至れり

夜に入り黑溝臺攻擊軍の諸隊は各方面に於いて敵の夜襲を受け特に蘇麻堡附近に於

ては前後より各一聯隊の敵より攻撃を受けしが格闘亂撃の後各方面共悉く敵を撃退せり修二堡方面に前進せし我一部隊は優勢の敵に支へられ徐家棚斜哨の線に停止す

廿八日狼洞溝附近より前進せし一兵團は巧に敵を攻撃し其右翼隊は午前九時卅分柳條口を占領し其左翼隊は午後三時李家窩棚を占領せり

黑溝臺攻撃軍の各隊は依然攻撃を續行せしが中央隊方面に於ては昨夜々襲し來りし敵の敗殘兵蘇麻堡部落内に潜入し在りて背面より尙ほ我を射撃せしかば此隊の一部は背面して此敵を殲滅し俘虜二百餘名を得たり

左翼隊は其側背に修二堡に前進する支隊の現出するを知り勇を鼓して前進を起し五家子を恢復せり

修二堡に向ひ前進せし支隊は優勢の敵を攻撃して同地を占領す時に午前三時なり

狼洞溝に在りし部隊は午前十一時同地を發し黑溝臺攻撃軍の最左翼に連りて黑溝臺の敵を攻撃する豫定なりしも八黃地、哈爾堡の線に在る有力なる敵より背射せらるゝを以て勢ひ先づ之を撃攘せざる可からず依て其一部を割きて修二堡に在る支隊は

協力して八黃地の敵を撃退せり敵は洪窩家棚方向に退却し其兵力歩兵約一聯隊、騎兵一旅團砲十二門、機關砲二、三門なり

廿九日各隊は連續三晝夜猛烈に敵を攻撃せしも未だ其の目的を遂せざるを以て更に諸隊を激勵して夜襲を實行せしめたり

黑溝臺攻撃軍の諸隊は全滅を期し數回の攻撃前進を企てしも敵の砲兵殊に機關砲の爲め頗る多大の損傷を蒙れり然れども諸隊は衝天の勢を以つて攻撃を續行す敵は我が猛撃に耐へず午前五時三十分より退却を始めたり是に於て我諸隊は逐次黑溝臺に突入し午前九時三十分に至り全く確實に之を占領し直ちに追撃し烟臺子蠟を經て土臺子に至る又左側支隊の一部は黃蠟蛇子を占領せり其他修二堡に在りし支隊は當面の敵を撃攘して七臺子及北方約五吉羅の無名部落に亘り渾河の線を占領せり大臺附近に在りし部隊は此日午前五時李家窩棚附近に在りし部隊と共に微弱の敵を撃攘して菲菜河子附近を占領し其主力は敵を追撃して渾河右岸に進出し長灘南方千米突に達せり

是に於て軍は全く敵を渾河右岸に驅逐せり我に對せし敵は西伯利第一軍團、集成軍團狙擊歩兵第二及び第五旅團、第八軍團の一部西伯利豫備第六十一師團並に獵歩兵等にして少なくも七個師團及び騎兵一師團を下らず此の敵は四方臺及び年魚泡附近に退却せり此役我は僅に三個師團に過ぎず而して立見第八師團之が中心たり

我死傷八九千に達し敵の損害も亦多大にして捕虜の言に依れば我左翼に向ひし歩兵四聯隊は殆んど全滅し一中隊にして二三十人に減せしもの少からず又敵の損害は一萬を下らざる可し而して此戰爭に與りし我軍は第八第二第五の三個師團とす、

川村鴨綠江軍の行動

第四軍の重鎭として每次奇功を奏せし第十師團長川村中將は、昨年一月俄に大將に任せられたり。同時に鴨綠江軍は編成せられぬ。是れ來るべき奉天會戰に於て滿洲軍の全線、此軍の活動を待つて始めて其戰端を開かんとするなり。此大任を帶びた

る川村大將は二月四日幕僚を從へて宇品を發し、大連より遼陽に向ひ、是れより樺子嶺、摩天嶺の嶮を越ゑて鳳凰城に着きしは二月十三日なりき。此處に滯在四日、清河城攻擊の作戰計畫は實に此間に成れり。這般の消息最も秘密に屬して敵遂に之を知らず。奉天會戰が彼の如き大効果を奏したるは即ち此秘密が成功せしなり。同時に軍の名譽も爲めに秘密に葬らるゝもの多く、當時に於ては其苦心慘憺たる經營も、普く世に知られざるの憾ありたり

風雲將に到ちんとす、沙河一帶の貔貅は暫く意氣を殺して戰機の熟するを待てり。阪井後備第一師團は軍の右翼として二月十九日戰を開始せり。即ち其一隊は城廠を發して敵を下夾河に擊破し、同時に他の一隊は蛤叭嶺を占領せり。是より樺子嶺の嶮險を奪取して漸次本攻擊に移れり。敵は清河城の前方一里小甸子の東南方高地(小旅順と名づけらる)に半永久的の堡壘を築きて我を待てり。二月廿三日直に之を攻立しも敵は天險に人工を施したる要地を占たるを以て容易に拔く能はず、翌朝未明、旅順より急行軍を以て百理の壘程を疾行し來れる鮫島第十一師團は其左翼となりて

小旅順を攻撃す。諸師團力を合せて强襲終日、遂に清河城を占領せり。是率天戰の序幕なりける

是れより第十一師團は雪を冒して太嶺の敵を擊攘し、三月廿七日敵を馬群丹に壓迫し、以て第一軍との連絡を取れり。然れども敵頑强にして退かず、一日に十五回の逆襲を受けし事さへあり。此戰鬪約十日に亘り、旅團長前田中將(隆禮)遂に戰死し、三月八日未明始めて馬群丹を占領せり。第十一師團は暴風砂塵の中に敵を驅逐しつゝ三月九日夜に入り、一個大隊をして撫順城市を占領せしめたり。三月十日敵は撫順城の北方高地に據りて盛に我を瞰射せしが、午後三時遂に之を擊退す。敵は總崩れとなりて鐵嶺方面へ退却せり

後備第一師團は清河城を陷れ、敵を追擊して金斗峪より四道河子に至り、三月二十七日愈孤家子を攻擊して地塔に進まんとせしが、敵は天險を利用し倍數の兵を以て死力を盡して之を防ぎしかば、全十日將卒一睡を爲さずして之に當り、三月八日辛うじて地塔を占領せるは其勞實に多とすべきものあり。三月十日第十一師團と連接

して撫順を攻擊し、其夜半强襲を以て渾河を渡り、又一部隊を以て營盤を占領せしめ、十一日敵を三方より追擊しつゝ道程十六里許を長驅して三岔子に入り、以て鐵嶺附近の敵を驅攘せり

是より後備第一師團は興京及び通化、懷仁を占領し、第十一師團は營盤に進み續いて八家子、英額城の敵を拂ひて英額邊門を堅め、而して其師團司令部は八家子に在りて之を指揮す、後備第一師團司令部は興京に在りしが、其戰線は五鳳樓を中心として、左は南山城を守りて英額邊門と相應じ、右は通化街を最終點として鴨綠軍の前線は殆と七十里に亘れり

清河城占領

川村鴨綠江軍は二月十九日より二十二日に至る間に於て葦子峪、金斗峪及び太子河左岸の地區を占領して近く敵に接し二十三日を以て清河城(本溪湖の東城十二里)附

近の敵を攻撃せり此の日朝來降雪紛々咫尺を辨ぜず地形險峻に加えるに太子河の融氷を以つてし諸隊の運動大に困難なりしも正午頃には我が第一線は既に敵を隔る五百米乃至千米の距離に接近し猛烈なる攻撃をなせり

敵は天險の陣地に據れるのみならず數月を費し堅固なる築城をなし數線の副防禦を設置し頑强の抵抗を持續せしを以て容易に之れを奪略する能はず於是翌二十四日の拂曉より更に攻撃を續行し午前十時頃に至りて彼我相接近して爆藥戰を交るに至れり敵の頑强なる抵抗も我が猛烈果敢なる正面攻撃と最も勇敢なる側面攻撃とに對し永く持續する能はず午後六時全く清河城を占領せり

我れに對せし敵は歩兵約十六大隊砲約二十門にして清河城を全く燒棄し混亂して北方に退却せり戰場に遺棄せし敵の死體百五十捕虜二十四、戰利機關砲三、小銃約二百

奉天の大決戰

日露陸戰の始め、敵は黑木軍を鴨綠江に防がんとして成らず。次で奥第二軍の爲に旅順の連絡を絶たれ、急行南下して得利寺に破れ、遼陽に退き沙河に敗れ、今や陷落艦隊全滅、悲境に次ぐに悲境を以てし、敵帥の苦悶察するに餘りあり。されば歐露本國に於てば續々新應援を輸送し來りて、一度勝利を博せんと期し、大に奉天に勝算を定めたるものゝ如し。此に於てか我大山元帥は、敵帥捕獲敵軍殲滅の大方略を以て、嘗に川村軍を最右翼たらしめ、二月廿四日新に旅順より鮫島第十一師團を疾行せしめ、强襲終日遂に清河城を攻略せしむ。是れ奉天戰の序幕にして、殊に四國師團が其要塞攻撃に馴れたる大手腕を以て頗る迅速の動作を爲せると、坂井後備第一師團が徒歩砲兵一大隊を具し曰砲十二門を以て其射程を過たず、巧に敵の堡壘上に落下せしめしが如き、敵が最も意外とせし所にして、之を以て彼等は乃木第三軍が悉く該方面に迂廻せしならんと誤認し、急遽其總予備隊を繰出して之に當らしめ

たり。然るに乃木軍の主力は、却て最左翼として奉天の西北新民屯方向より大迂回運動を以て、その虛を衝き、遂に彼を包圍してその退路を遮斷し、敵帥黑鳩公をして、周章狼狽爲す所を知らず、「予は包圍せられたり」の打電をなさしむるの窮地に陷れたるなり。此役戰線四十餘里に亘り、兩軍の兵百萬と算せらる。蓋し有史以來の大戰、この大決戰に於いて空前の大捷を博し全世界を震駭せしめたる皇軍の威武も亦大なるかな

奉天一帶占領

（三月八日代大本營發電 滿洲軍總司令部）

敵は今朝來退却を始め我各軍は猛烈に之を追擊中なり

全線總追擊

（三月九日午前 大本營發電）

興京方面　馬群丹方面の敵を擊攘せし我部隊は尙追擊を續行しつゝあり

沙河方面　鐵道線以東に在ては敵漸く動搖の徵候を呈せしを以て去る七日夜半より全線總攻擊に移り敵を其陣地より擊攘し渾河々孟に壓迫しつゝあり

鐵道線より渾河左岸に至る全地區は既でに我占領に歸せり

渾河右岸　渾河右岸に在ては揚士屯及李官堡附近の敵軍引き續き頑强に抵抗を持續し屢々逆襲し來りしも我兵悉く之れを擊退し多大の損害を與へて漸次奉天方向に壓迫中なり

奉天北方　又奉天北方の地區に在ては敵の頑强なる抵抗を受けしも小家屯（奉天西北約二里）八家子（小集屯東北約半里）及三臺子は既に我有に歸し鐵道は奉天北方に於て我既に之を破壞す

占領後の追擊　其一

（三月十日 大本營發電）

興京方面の我部隊は撫順北方高地に據り尙抵抗しつゝある優勢の敵を攻擊中也沙河

方面の各兵團は敵を全く渾河右岸に擊退し目下奉天東方及北方に於て之を包圍し戰場追擊中也諸報告によれば敵は本十日正午より鐵道線路と奉天街道中間の地區を全く隊形を紛亂し疲勞困憊の狀を呈し實に悲慘の狀態を以て三窪(奉天北方約三里)附近より奉天附近に亘る地區に充滿して續々北方に退却す其の數實に幾萬なるを確む る能はず而かして該地附近に在りし我步砲兵は逐次此の敵に銃砲火を集中し莫大の損害を與へつゝ日沒に至れり

又我一部隊は興隆甸より急行し夕刻蒲河(奉天北方約五里)附近に至り敗退する敵に對して多大の損害を與へ敵を殲滅せんことを勉めつゝあり

其二 (三月十一日午後 大本營着電)

追擊繼續 各方面より敵を急追して渾河右岸に進出せし我兵團は到る處敵に大損害を與へつゝ昨十日午後には全線殆ど渾河を距る北方約五里の線を占領し今十一日は依然追擊中なり

大部隊の投降 今十一日朝蒲河附近を出發して北進せる我が部隊は出發後間もなく

敵の大縱隊北方に退却するに遭遇し接戰格鬪遂に之を包圍し降服せしめたり奉天附近は猶ほ敗殘兵の抵抗し又は投降し來るものあり目下專ら其清掃に勉めつゝあり

捕虜及鹵獲品 敵の遺棄したる屍體は各戰場到る處に累々として未だ之れを處置するに遑あらず敵の各所に於て受けたる損害は未だ精確に調査する能はずと雖も其の死傷者捕虜鹵獲品は非常に多大にして被服糧秣等は積んで山の如く容易に計算することを能はず

其三 (三月十三日午前 大本營着電)

追擊尙繼續 各方面より敵を追擊して北進せる各兵團は處々に抵抗を試んとする敵の敗兵に多大の損害を與へつゝ昨十二日には敵を全たく奉天を距る北方約十里の地區より其以北に驅逐し尙追擊中也

委棄せる軍需品 九里溝子(奉天北方約六里にして鐵道線の西側)の南方高力屯附近より長さ約五里に亘る地區内に彈藥其他軍需品を積載しある無數の車輛遺棄しあり未だ其數を調査するに遑あらず

鹵獲せる軍旗　鹵獲軍旗の内一箇は第十六軍團第四十一師團第百六十二聯隊のもの
にして千八百七十四年千八百七十八年及び千八百八十三年の三戰役に參與し千八百
七十八年には拔群の功ありし聯隊なり其衛戍地はウキリナ軍管區内モギリョフにし
て聯隊長は大佐ガフリロフなり

貨車四百輛以上　小銃約二千挺あり尙敵は馬群丹、馬牛家堡等の倉庫を燒棄せしも
糧秣數千石其他彈藥諸材料等甚多し

其四　（三月十四日午前大本營發電）

興京方面　我一部隊は去十一日營盤（撫順東方約七里）の敵を北方に擊退し之を占領
せり

沙河方面　各方面とも依然敵の敗殘兵を擊攘しつゝあり

鐵嶺街道以東の山地に在ては我輜重監視兵等に向ひ降伏せる敵の將校下士卒多數あ
り

鐵嶺占領（三月十六日午前大本營發電）

我先進部隊は到る處敵を急追し今十六日午前零時二十分鐵嶺を占領せり

興京占領（三月十六日午後大本營發電）

興京方面の我部隊は十三日興京を占領せり

昌圖及開原占領（三月二十二日午後大本營發電）

我軍益々北進し其一部隊を追蹤して昨二十一日午後二時半昌圖（開原より西北五里
二十八町）に進入せり敵の大部隊は鐵道線路に沿ひ東北方に潰走中其騎兵の一部は
昌圖の北方約二、三哩米の地に停止しあり

英額城占領

（四月十五日午後大本營發電）

興京方面より北進せし我が兵團は逐次敵を壓擁し昨十四日午後一時英額城（興京の北約十四里）を占領せり

波羅的艦隊の東航

○敵艦隊終に來る　旅順救援を目的としたる波羅的艦隊は、五六兩月に二回出發して引返したる後、十月十三日を以て愈リヴアウを發して東航の途に上りぬ。同二十一日にはバルに漁船砲擊の滑稽的亂暴を演出し、亞弗利加の西北、モロッコの一港タンヂールに寄港し茲に全艦隊甲乙二隊に分れ、甲艦は十一月一日同所を發し太西洋を迂廻し、十二月三十日喜望峰を通過し、乙隊は十一月十四日同所發、クリート島のスダ灣、ポートサイドを經て十二月一日ジブチーに着き、尋で同月下

旬マダガスカル島ノッシベーに集合して久しく碇泊し、人をして東航の望なきを疑はしめたり。既にして一月二日旅順開城して東航の目的は殆ど之を失ひしが、三月十六日猛然として茫々碇まる所なき印度洋を横斷し、四月八日新嘉坡を過ぎ、佛領ホムラン灣、ポンコエ灣等に中立を侵害し、第三艦隊を待ち合せて戰鬪準備をなせり。蓋し其艦隊の勢力を恃み雌雄を海上に決し、以て我滿洲軍の後方斷絶を萬一に期したりしなるべし

是より先き第三艦隊の編制成り、二月十七日リバウを發し地中海を過ぎ、四月四日シブチーを發し一ヶ月を經て翌五月五日新嘉坡を通過し即日出發の第二艦隊と合し北上して五月二十七日我對馬海峽に迫れり

○敵艦隊の勢力　敵は第二第三の兩艦隊に屬する最後の希望を以てし、浦鹽敗殘の三艦と共に日本海上の權力を爭はんとしたりしもの、五十餘隻の艦隊、威風は堂々たり、光景は壯大なり。優に我と對抗し得るのみならず、勝敗何に決するも我は多少の損傷を受くるを免れざるべく其勢力の堂々たる、充分に遂來するの價値

あり、二日間の戰爭に僅に我三艇を擊沈して全艦隊の殲滅せらるべきを期せざりしもの、豈に獨り露帝のみならんや。

日本海の大海戰

○敵愈々對馬海峽に來る　五月十四日佛領ホンコオエ灣を出發したる敵の艦隊は其後全く踪跡を失しゝが、二十五日突如として露艦隊八隻上海に入れり。蓋し敵は支那海を北上し、十九日夜を以て臺灣比律賓間のバッシー海峽を通過し、針路を北にし臺灣の東より再び支那海に入り以て對馬に向へり。敵が三海峽の何に出づべきかは世界の均しく疑問とし、敵も亦初め決する所なかりしが如し。安南海上に入り後大會議を開き、前途の航路を研究し、終に遠く太平洋を迂回する煩を避け、直に對馬海峽に日本艦隊を衝き、勝敗を一擧に賭し、以て祖國に對する大任を完うするに決し、各艇の準備完了を待て猛然北上し、二十七日未明無事濟州島沖に

到着し、雲烟濛糊の間に同島影を認めたり。

二十七日午前四時五十七分我が哨艦信濃丸は無線電信にて報じて曰く、敵艦見ゆと。茲において和泉は之を確めんため敵艦隊に續行すべく針路を取りて出動せり、此日濃氣深く海面を鎖して、展望五海里の外に出でず。午前六時四十五分初めて前方五島の西北沖合に敵艦を見る。戰艦七隻、巡洋艦特務船合せて二十六隻、外に驅逐艦數隻より成り、ヂムチユーク型の前衝として二列縱陣を作り、その右翼に主隊を置き、左翼に比較的劣勢艦を備へ、後尾に特務船を配置し最後に病院船を伴ひ、約十二浬の速力にて東北に進行するものゝ如し。依て和泉は直に無線電信を以て之を本艦隊に報告したり。同艦は尙吾が主力艦隊が首尾よく敵艦隊に遭遇するまで彼と接觸を保ち、その行動を一々本隊に報告し、尋で本隊より敵と接觸を保てとの命令に接したり。斯くて和泉は沖の島附近に達せし頃初めて砲聲を聞き、吾が艦隊が已に敵と會戰せるを知り、本隊に合せんとして沖の島西北を過ぐるとき、敵の主力艦隊は和泉に向て砲火を集中し、和泉亦應戰しつゝ、午後三時四十六分遂に本隊に合する

を得たり

○敵艦隊の潰亂　哨艦の通報に接せし我が主力艦隊三笠を始め、舳艫相啣み て根據地を發し、針路を東南に取り、迂回して對馬東北道に向ひたるが、午後二時二十二分初めて同水道を通過せんとする敵隊を濃氣の内に認め、全艦戰闘旗を掲ぐ、時に旗艦三笠より信號あり曰く、『皇國の興廢此の一擧にあり、各員努力奮闘せよ』と各艦肅然たり敵は早くも砲火を開き砲擊を開始したるも、其距離一萬米突にして我が艦に達せず。我未だ應戰せざりしも、此時恰も西南の風强く我は風に向つて進まざるべからざるの不利の地にありたれば、即ち廻轉して單縱陣を取り、敵艦隊と並行して北に向ひ、イの字形になり絶ねず敵の先頭を壓しつゝ四千米突の距離に達し、初めて打ち方始めの信號旗、旗艦三笠の上に現れぬ、之と同時に各艦は敵艦目蒐けて一齊に砲擊を開始したり。即ち彼は其左舷より我は右舷より一列に並行して砲戰約一時間、沖の島北方に至りて兩艦隊相離れ、更に又相會して砲火を交へ、一離一合此の如くすると前後六回に及び、敵の戰艦ボロヂノ先づ戰闘力を失ひて列外

に退き、旗艦スワロフ擊破せられ、其他損害を蒙れるもの多大にして、敵戰闘力の過半を失ひ、隊形全く混亂したり、磐手が敵彈を受けたるも即ち此時なり

第一戰終りたる後は敵の隊形全く混亂し、我は各自に敵を索め狙を定めて砲擊したれば、敵は或は破壞沈沒するあり、或は火災を起して黑烟に包まれたるあり、右往左往に逃走する敵艦は濃氣の内にその所在を失ひ、須臾にしてまた彼方に艦影を現はすと云ふ有樣にして、我艦隊は所在に敵艦を求め、或は砲火を以て或は水雷を發射して烈しく之を攻擊したり

日沒して彼我砲火を中止し、主力は某地點に引き揚げたり。曩に命ありて夜に入らば直に水雷襲擊を行ふ手筈なりしかば、豫定の如く各驅逐艦隊は二手に分れて終夜敵を襲擊せり

○敵艦數雙を捕獲す　翌二十八日早朝より我艦は敗殘敵艦の水路を推定し再び之に會すべく出動せしに、午前十時過ぎ遙かに一萬米突の地點に於て、敵艦隊五隻が黑烟を揚げて遁走するを認めたれば、我は豫期の行動をとりて之を包圍した

り。近ずいて見を見れば敵は戰艦ニコライ一世、同アゾール、裝甲海防艦セニヤウイン、同アプラキシン、及び巡洋艦イヅムルドにして、我より砲火を開きたるにイヅムルドのみは分離して逃走したり。他四艦は敢て應戰せざるのみならず、彼は萬國信號を以て『日本軍艦に信號す、降伏』と信號せり。依つて砲撃をとゞめしに、彼は更に檣頭高く日本國旗を掲揚せり、午前十時四十五分山田中佐は捕獲の命を受け水兵二百名を率ゐ、短艇二隻に乘じニコライ一世に赴きたり。是より先きヂボガトフ少將は既に抵抗の無益なるを知り降伏を決心したるものゝ如し。各艦長を旗艦に召集し、『事既に茲に至る余等の抵抗は無益なり、徒に多數の人命を失はんよりは降伏せん。去れば一旦降伏したる以上は武器その他を現狀のまゝに日本艦隊に引き渡すべし』と宣告したる由にて、山田中佐の同艦に至りたる時は各艦長皆同艦に集り居たり、山田中佐即ち曰く『我等は日本軍艦より來れり、士官は皆上に昇るべし。兵卒は前甲板に整列すべし』と、彼等整肅に前甲板に集り、中佐は總べての書類を受領して捕獲の手續を了せり。此等戰鬪艦は六月五日左の如く命名せらる

原名	新名	進水	噸數	速力
戰艦 アリヨール	石見	一九〇二	一三、五一六	一七、六
同 ニコライ	壹岐	一八八九	九、五九四	一四
裝甲海防艦 セニヤウイン	見の島	一八九四	四、九六〇	一六
同 アプラキシン	沖の島	一八九六	四、一二六	一五
驅逐艇 ―	―	―	―	―

計五隻　三二、一一六噸

廿七八兩日の戰鬪勝敗の決は、約一時間を以て日本海軍の勝利に歸し、敵艦四十一隻は悉く擊沈、捕獲。逃走せるもの巡洋艦四、驅逐艦三隻のみ。以て勝利の程を察するに足る

○ロ提督を捕獲す

蓮は廿八日敵を追擊中、夕刻鬱陵島の南方に於て敵の驅逐艦ビエードウイを捕獲せり。同艦には廿七日の戰鬪中沈沒したる敵の旗艦クニアズフロブより、敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將、エンクヰスト少將及

び幕僚以下八十餘名移乘し居りしを以て悉く之を捕虜とじたり

○敵將殊恩　軍艦四隻を率ゐて投降せし敵將チボガトフ以下に對し、特に左の通り仰せ出さる

一、チボガトフ少將に戰況報告書並に死傷者及び捕虜となりたる者の名簿を、露國皇帝に送呈するを許すこと

二、前記四隻より收容せる捕虜士官以上に宴會の上其故國に歸還することを許すこと

○勅語を賜ふ　五月三十日聯合艦隊司令長官に左の勅語を賜はる

勅語

聯合艦隊ハ敵艦隊ヲ朝鮮海峽ニ邀擊シ奮戰數日遂ニ殲滅シテ空前ノ偉功ヲ奏シタリ

朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對スルヲ得ルヲ懌フ惟フニ前途ハ尚遼遠ナリ汝等愈ヨ奮勵シテ以テ戰果ヲ全フセヨ

○彼我の損害　我艦隊の損失は二十九日の夜襲に際して三十四號艇、三十五號艇及六十九號艇の三隻敵の防禦砲火に斃沈せられたりしも、其乘員の大部分は僚艇に救助收容せられたり。此役我損害戰死百十三人、負傷四百二十四人、合計五百三十七人なり

敵の損害は明ならざるも少將フエルケルザムは戰死し、俘虜中將ロヂエストウエンスキー、少將チボカトフ以下總數六千百四十二人、内死亡せしもの三人

日本海に於ける敵艦

▲擊沈

戰艦	「スワロフ」	一三、五一六噸	同	「ナヴァリン」	一〇、二〇六
同	「アレキサンダー第三世」	一三、五一六	巡洋艦	「ナヒーモフ」	八、五二四
同	「ボロヂノ」	一三、五一六	同	「ドンスコイ」	六、二〇〇
同	「オスラービヤ」	一二、六七四	同	「モノマフ」	五、五九三
同	「セシイウエリッチ」	一〇、四〇〇	同	「スヴエトラーナ」	三、七二七

同　「セムチューグ」　三、一〇三
海防艦「ウシャーコフ」　四、二二六
特務船「カムチャツトカ」　七、二〇七
同　「イルチツシユ」　七、五〇七
驅逐艦　三隻
▲捕獲
戰艦「アゾロール」　一三、五一六
同　「ニコライ第一世」　九、五九四
海防艦「アブラキシン」　四、二二六
同　「セニヤーツイン」　四、九六〇
驅逐艦「ビエードツイ」　三五〇
捕虜中將ロセストウエンスキー、少將ネボガトフ
少將エンクイスト(?)以下三千餘名

日露兩艦隊總損害比較表

艦船種類	敵艦隊名	露 沈	露 沒	露 武裝解除	露 捕獲抑留	日本 沈	日本 沒
		隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
戰艦	波羅的	六	七一、一二〇	一	一二、九一二	〇	二三、一一〇
	旅順	六	六〇、三一二			二	一七、三二〇
裝甲巡洋艦	浦鹽	二	一八、六六二				
	波羅的	一	六、〇〇〇	〇	〇〇		
	旅順		四、一二六			二	九、〇八六
巡洋艦	波羅的	三	一六、四三一	二	一二、六三六		
	旅順	五	二七、一四七	逃走四	一九、七六四	〇	〇

假裝巡洋艦　旅順　三　一七、三五六〇　二　一〇、五七五〇　二　一四、九七五　二　四、二一二
　　波羅的　四　二　一　二、二二四
砲艦　旅順　一一〇　一一、七六四　一　一
　　波羅的　一　二、二二四
驅逐艦　旅順　一三六　四、三三〇　一三　四、一二〇　一　二六〇　三　七三八
　　波羅的
小計　旅順　三八一　一三九、六六三〇　一七　四一、四六七
　　浦鹽　二二　九、六〇〇　九　一九、七六四　七　四七、四三一　一一　三三、三七〇
　　波羅的　一一　一、五八五
合計　六一　三七、二四八　二六　六一、二三二　七　四七、四三一　一一　三三、三七〇

備考　露國海軍の總損害は九十四萬三十四萬五千九百十噸に及び我海軍にありては十一隻三萬三千三百七十噸なりと雖捕獲及旅順に引揚げたるを算すれば開戰前に對し却て其數を增せり

樺太占領

全國各師團管下より勵員下令の第十三師團は、陸軍中將原口兼濟之を率ゐて樺太に向ふ。優勢なる我北遣艦隊は陸軍上陸の援護として必要の諸點を砲擊し師團は先づ首都コルサコフを占領し、漸次全島を略して遂に敵守備軍の降伏を見る。此役守備兵死力を盡したりしも、我軍連戰連勝の勢を以て到るところ彼等を蹴破し、講和談判以前に於て全島を占領したるは原口師團の功多しと謂ふべし

北韓軍の行動

露軍境城より吉州を經て城津に侵入し、益韓國の北境に爪牙を、逞ましうするの情報に依り、中將三好成行は後備第二師團長として、北韓軍三箇旅團を率ゐて之に向ふ。即ち丸井少將の後備第十六、池田少將の後備第十七、酒井少將の後備第十八旅團是なり。就中第十七旅團は師團編制以前に先ち、夙に北韓に在りて開戰の當初より最終まで具さに苦艱を嘗めたり。丸井旅團は三十八年一月十八日大阪を發して大連に上陸し、鴨綠江軍の別働隊として惠仁方面に進擊し、同四月撫順、通化等を占領し、更に鴨綠江を下りて安東縣に集中し、六月北韓に向ひ海路元山より上陸し、一ヶ月以上の連續行軍をなし、八月二日富居(豆滿江を距る六里)に到着せり。其途中大洪水に逢ひ交通を遮斷せられ、行軍困難を極め、第三大隊長を始め兵士等の溺死せし者少なからず。而かも堅忍不拔なる全隊の將士はこれに屈せず、一難を經る毎に勇氣百倍し遂に豫定の目的地に到着し、我に倍するの敵を豆滿江の北岸に壓して、前哨を張ること七十五日、山路嶮岨、輜重續かざるの間に頑强の敵に當り、具に困難を嘗めつゝ進擊せり

軍は長谷川大將の指揮に屬したるも、其實現場は悉〳〵三好中將の指揮なりしと云ふ、第十八旅團は始め石田少將(政珍)之を率ゐ後酒井少將之に代る。旅團は三十八年四月廿六日を以て博多灣を出帆し、廿九日元山に上陸、咸興、城津を經て鏡城に進み行々少數の敵兵を蹴破し、五月一日昌斗嶺に於て大激戰を交へ、大に敵を破る。此役札幌後備第二十五聯隊の一部隊は後備第五十六聯隊の一部隊と共に難戰苦鬪大に殊功ありて、左の如く感狀を與へらる

感狀

後備歩兵第廿五聯隊第二中隊第三小隊

小隊長歩兵少尉　吉田悌五郎　外七十六名

右は九月一日昌斗嶺附近の戰鬪に當り陸軍歩兵中佐内藤基の指揮に屬し優勢なる敵に對し猛火を冒し急峻なる山岳を攀登して勇猛果敢に攻擊を續行し死傷續出するも

敢て屈せず數回の突擊を實行し遂に敵を擊退して昌斗嶺一帶の陣地を奪取したり此結果は又松洒洞西北高地にありて友軍に對抗せし敵をして退却するの止むを得ざるに至らしめ以て同方面の敵兵を全く擊壞することを得せしめなり其武功偉大なりと認む依て感狀を授與す

明治三十八年九月八日

韓國駐劄軍司令官男爵　長谷川好道

平和と米國の高義

戰局の形勢全く定まり、亦た動かす可からざるものあるを以て、米國政府は日露兩國が此際媾和談判を開始せんことを希望し、其旨帝國政府へ申込來れり。其頗末に關し外務當局者は六月十日午後六時市內各新聞社員に左の文書を交付したり

在本邦米國公使は本月九日附を以て帝國外務大臣に對し左の照會をなせり

本使は國務長官の電訓に從ひ閣下に對し左の通牒をなすの光榮を有す

大統領の所感を以てすれば今や人類一般の利益の爲め目下の慘憺たる且痛歎すべ

き戰爭を終局せしむること能はざるかを見んが爲め大統領に於て努力せざるべからざる秋方に至れり

合衆國が日露兩國と友好親善の關係を保つや久し合衆國は此兩國の繁榮福祉を祈ると共に此の二大國民間の戰爭に依り世界の進步阻礙せらるゝを感ず

故に大統領は日露兩國政府に於て兩國自己の爲めのみならず文明世界全體の利益の爲相互間に直接の媾和談判を開始せんことを切望す

右媾和談判は全然兩交戰國間に於て直接に之を行ふべく換言すれば即ち日露兩國の全權委員は何等仲介者を設けずして會見し以て此等兩國の代表者に於て媾和條件を協定すること能はざるかを見るに至らんこと是大統領の勸告する所なり

大統領は熱心に日本政府に請ふに同政府が此際如上の會合に同意せんことを以てし又露國政府にも等しく同意を求めつゝあり

大統領は媾和談判其ものに關しては何等の仲介者を要するを見ずと雖も若し兩國係國にして會合の日時及場所に關し提議を整ふるに付大統領の力を假るを利あり